

○第三句以下は下ニ著テ著古シタル衣ヲ上ニ取著ムヤとなり○裏の意を古義に『これはいやしき婢などを久しくなれうつくしみて妻とする時よめるか』といへれどただしのびて馴れたりし女を表だちて妻とする時の歌ならむ

くれなるのこそめのころも下に著て上にとりきばことなさむかも

紅之深染之衣下著而上取著者事將成鴨

コヅメは濃く染めたるなり。下ニキテ云々は今マデ下ニ著タリシヲコタビ上ニ取著バとなり。コトナスはイヒタテハヤスなり。卷四(六四二頁)にもソコモカ人ノワヲコトナサムとあり○裏面の意はシノビテ馴レタリシ女ヲ表ダテ妻トセバ定メテ人ノイヒタテハヤサムとなり。以上二首一聯の歌なり

つるばみのときあらひぎぬのあやしくも殊欲服このゆふべかも

椽解濯衣之恠殊欲服此暮可聞

第四句を舊訓にコトニキホシキとよめるを古義にケニキホシケキとよめるは非なり。ホシケキといふ辭は無し○こは上なるツルバミノキヌキル人ハといふと一

首相聯れる歌にて賤者ニナリテ心ノママニフルマヒタシト此夕ハ殊ニ思フといへるならむ。略解に『中絶たる人をまたおもひ出るをたとふ』といひ古義に『一たび中絶たる人を又おもひいだして云々』といへるは従はれず○恠は怪の俗體なり

橘の島爾之△居者河とほみさらさずぬひしわがしたごろも

橘之島爾之居者河遠不曝縫之吾下衣

橘は大名、島は小名にて大和國高市郡の地名なり。上一三四九頁にくはしくいへり○譬喩は四五句のみにて上三句は第四句をいはむ爲に云へるのみ。さて裏面の意は古義にいへる如く媒ヲ立テナドモセズシテ逢ヒソメツといへるならむ。但古義に上三句をも譬喩に加へて人遠クハナレタル地ニキタル故ニと譯せるは従はれず○さて島は飛鳥河の右岸にあれば河トホミとはいふべからず。第二句の島爾之居者は島爾之不居者とありし不のおちたるにあらざるか

寄絲

河内女の手染の絲をくり反片絲にあれどたえむともへや

河内女之手染之絲乎絡反片絲爾雖有將絕跡念也

カフチメは河内國の女なり。タエムトモヘヤは卷二(二八二頁)なるスギムトモヘヤと同例にてただタエメヤといへるにてオモフは例の軽く添へたるなり。一首の意は略解に

片思ながらさすがに絶えんとは思はんやと也
といひ古義に

片思にてはあれどしかすがに思ひ絶果むと思はむやは、絶むとはおもはず、くりかへしくりかへしえ思ひわすれず、と云をたとへたるなり

といへり○第三句は從來クリカヘシとよめれど聊心得がたし。古今集なるカリクラシタナバタツメニ宿カラム、ワガセコガコロモノ裾ヲフキカヘシのカリクラシ、フキカヘシと同格にてクリカヘシツといふばかりの意にや○さて片絲はいまだより合せぬ絲なればカタイトニアレドはイマダ逢ハネドといふことの譬なり。略解古義の釋は共に従はれず

寄玉

わたの底しづくしら玉風ふきて海はあるとも取らずばやまじ

海底沈白玉風吹而海者雖荒不取者不止

シヅクを宣長遠鏡卷五一四十一は「物の水の中に見ゆること也、、、只沈むことなどをシヅクといへることなし」といひ守部催馬樂入綾は「シヅミスクといふ言の約れるなり」といへり。案ずるにシヅクはなほシヅムと同源の語なり。此歌、次の歌、又一首おきて次なる歌に沈と書けるを見ても沈むことなるを思ふべし。ただ音の似たる故のみにて沈の字を書くべけむや。但シヅクは沈み居る意に用ひて沈み行く意には用ひず。しかも略解にこゝのシヅクを「シヅケルを約云にて沈みて有也」といへるはいみじき言なり。梅サケル宿といふべきをウメサク宿といふは常の事にあらずや。ウメサク宿とあるを見てサクはサケルをつづめいへるなりといふべけむや。さてシヅクの語源は古義に

石シヅク著なり。次下の歌に石著玉と書たる如し、、、海底の石に著てあるをシヅクといへり。催馬樂にカヅラキノ云々白玉シヅクヤ云々を靈異記には磯著と書き。思合すべし

といへり。げに石著シツクの義なるをそれよりシヅムといふ語は出来るならむ
因にいふ。古今集哀傷部に

水の面にしづく花の色さやかにも君がみかげのおもほゆるかな

といふ歌あり。シヅクを沈の意とせむに水ノ面ニシヅムとは云はれぬことなれば「水にうつれることなり」とか「水中に見ゆることなり」とかいふ説も起れるなれど萬葉、催馬樂などなるはみな沈み居ることとしてよく通ずるを此歌のみ其意にかなはざるを思へば作者があらぬ意に心得てよめりとするか又は誤字ありとせざるべからず。然るに作者小野篁は萬葉時代を去ること遠からざる人なれば萬葉時代にしばしばつかはれて普く人の知れる語の意を誤解すべきにあらず。一方には流布の古今集には誤字頗多ければ世人の思へるよりは遙に多し。余は初二は水ヅコニシヅク花ノ色とありしを誤れるものと認む。萬葉にワタノ底シヅク白玉底キヨミシヅケル玉ヲ水底ニシヅクシラ玉底キヨミシヅク石ヲモなどある、皆例證とすべし

底清みしづける玉をみまくほりちたびぞつげしかづきするあま

底清沉有玉乎欲見千遍曾告之潛爲白水郎

此歌に底清キヨミ沉有玉ヲミマクホリとあり又卷十九に藤ナミノカゲナル海ノ底清キヨミ之都久石ヲモ珠トゾワガミルとある底キヨミを底ガ清サニと心得たるより旁シヅクを見ゆること、せではかなはぬやうに宣長守部等は思ひしなり。しばしばいひし如くこのミにはサニと譯すべき外にキニと譯すべきあり。このキヨミもキヨキニと譯すべくシヅクと原因結果の關係あるにあらざるなり。○さて上(一三八三頁)にも

わたつみのもたる白玉みまくほりちたびぞつげしかづきするあま

といふ歌あり

大海のみなぞこてらし石著玉いはひてとらむ風な吹行年

大海之水底照之石著玉齊而將採風莫吹行年

イハヒテを略解に神ニ乞祈テと譯し古義に齋祈イハヒトシテと譯せり。案ずるにこのイハヒテは卷五詠鎮懷石歌(八八頁)なるイトラシテ、イハヒタマヒシ、マタマナス、フタツノ石ヲまた上(一三五〇頁)なるシシマツ君ガイハヒヅマカモのイハヒと同例

にて大切ニシテといふ事なり○行年は舊訓にコソとよめるを宣長は所年の誤としてソネとよめり。之に従ふべし

みな底にしづく白玉誰故に心つくしてわがもはななくに

水底爾沈白玉誰故心盡而吾不念爾

第三句は濱成の歌經標式に他我由惠爾と書けり。さればタレユエニとよまでタガユエニとよむべし○白玉ヨ汝ナラヌ外ノモノノ爲ニといふ意なり。第三句以下は下なる

朝霜のけやすき命たがために千歳にもがとわがもはななくに

また古今集戀四なる

みちのくのしのふもぢずり誰故にみだれむとおもふ我ならなくに
と同格なり

世のなかは常かくのみかむすびてし白玉の緒のたゆらくもへば

世間常如是耳加結大王白玉之結絶樂思者

カクノミカのノミは例のカクを強むる辭なり。さればカクノミカはカクヤアラム

となり。一首の意は結ビテシ白玉ノ緒ノ絶ユルコトヲ思ヘバ世ノ中ハ常ニカクヤアラムといへるなり。略解に「此歌は譬喩とはきこえず」といへり○下の結は諸本に

緒とあり

伊勢の海の白水郎之島津我あはび玉とりて後もか戀のしげけむ

伊勢海之白水郎之島津我鯁玉取而後毛可戀之將繁

第二句を從來アマノシマツガとよめり。契沖の説に

島津は昔有けむ伊勢の海人の名にや

といひ古義に

中山嚴水此は伊勢の島津てふ海人がめづらしき眞珠をかづき得しと云傳の有しなるべし

といへり。アマノ島津とあれば人名にはあるべからず。又故事によりてよめるならば結句はシゲカリケムとやうにいはず。略解には鳥津流の誤としてトリツルとよめり。トルチフとはいふべくトリツルといふべき處にあらず。案するにこは島津之白水郎我とありしを下上に寫し誤れるにて島津は志摩津にてやがて

志摩國なり。舊事本紀卷十國造本紀に伊勢國造と尾張國造との間に

島津國造 志賀高穴穗朝○成務天皇御代出雲臣祖佐比禰足尼孫出雲笠夜命定賜國造

とあるはやがて日本紀持統天皇紀に見えたる志摩國造なり。されば志摩國はいにしへ島津國といひしなり。さてその島津國は伊勢海に臨みたれば無論伊勢ノ海ノ島津といひつべし○玉を取るを女に逢ふに譬へたるなり。されば四五は女ニ逢ヒテノ後ニ却リテ戀ノシゲカラムカといへるなり

(わたの底)おきつ白玉よしをなみ常かくのみやこひわたりなむ
海之底奥津白玉縁乎無三常如此耳也戀度味試

ヨシヲナミは取ラム由ヲナミといふことなるべけれど辭足らず

(葦の根の)ねもころもひてむすびてし玉の緒といはば人とかめやも
葦根之勲念而結義之玉緒云者人將解八方

ネモコロモフは懇ニ思フにて一つの語となれるなり。熟慮シテといふ意なり○玉

ノ緒は男女の契にたとへたるなり○イハバはキカバといはむに同じ。上にもツルバミノ衣キル人ハコトナシトイヒシ時ヨリ著ホシクオモホユとあり○人トカメヤモは人が其緒ヲ解カムヤハとなり○勲は勲の誤なり

白玉を手には不纏爾匣のみに置有之人ぞ玉令泳流

白玉乎手者不纏爾匣耳置有之人曾玉令泳流

第三句の爾を略解に氏の誤として

マカズシテといふべきをマカズニといふは俗語なり。マカズテと有べしといへるに對して古義に

かやうにズニと云も古言なり

といひて卷九なるイモ不宿ニワレハゾコフルなどあまたの例を擧げたり○ハコノミニは今匣ニノミといふに同じ○置有之は從來オケリシとよみたれどシといふべき處にあらず。之の字を衍字としてオキタルとよむべし○結句は舊訓にタマオボレスルとよめるを略解古義にタマオボラスルとよめり。さて略解にいたづらに物を水に入て溺れしむるに似たり

と釋き古義に

その玉を水中に捨ておぼらしめつると同じ

と釋けり。案ずるに泳を溢の誤としてタマハフラスルとよむべし。ハフルは物の無用となるをいふ。記傳卷三十九二三頁。○參照。石崇の王明君辭の匣中玉を思へるにてもあるべし。

照^{ウツ}左^サ豆^{マメ}我^ガ手^テにまきふるす玉もがも其緒はかへてわが玉にせむ
照^{ウツ}左^サ豆^{マメ}我^ガ手^テ爾^ニ纏^ル古須玉毛欲得其緒者替而吾玉爾將爲

初句を舊訓にテルサツガとよめり。眞淵は

テルサツは玉商人を云か。サツは幸人サツドの意もて賣る人をも云へるか云々

といひ略解古義には誤字なるべしといへり。なほ下にいふべし。○女を玉にたとへたる事言ふまでもなし。ソノ緒ハカヘテはワガ玉ニセムといふにつきてそへ云へるのみ。眞淵が「其緒とは先夫を云ならん」といひ雅澄が「其緒とは先の夫をたとふるなり」といへるは非なり。先夫は既に照左豆にたとへたるにあらずや。○照左豆について再云はむ。古義に

ワタツミノなどあるべき所なり。猶考べし

といへり。此説恰も余の思得たる所と一致せり。他の手にまき古したる玉女を獲て我玉我妻とせむといへる。相手は超人間の物ならざるべからず。而して超人間の物にて玉鮎珠に縁あるは海神即ワタツミなり。されば初句はワタツミガとあるべし。文字は縣都美我などありしを誤れるならむワタツミは集中に海若海神渡津海綿津海和多都美和多都民など書けり

秋風はつぎてなふきそわたの底おきなる玉を手にかくまでに

秋風者繼而莫吹海底奥在玉乎手纏左右二

ツギテはツヅキテなり。こゝのマデニはマデハと心得べし。卷十一にも

國とほみただには逢はずいめにだに吾にみえこそあはむ日までに

とあり。集中にマデニといへるにはただマデの意なるとマデハの意なるとあり

寄日本琴

膝にふす玉の小琴の事なくば甚イコバク幾許わがこひめやも

伏膝玉之小琴之事無者甚幾許吾將戀也毛

第四句を契沖はイトココダクハ、略解にはイトココバクニ、古義にはハナハダココダとよめり。まづ略解の訓に従ふべし。○初二は序のみ。即コトにかゝれる序なり。コトナクバは故障ナクバ、イトココバクニはカク甚シクなり

寄弓

みちのくのあだたら眞弓著絲而ひかばか人のわをことなさむ

陸奥之吾田多良眞弓著絲而引者香人之吾乎事將成

アダタラは陸奥の地名なり。關^{ツサミチ}政方の備字例に

このアダタラは地名にて後にアダチノ眞弓ともよみて今の安達なることは先達の説にて知られたり。さてアダタラを安達と書けるよしは地名を二字に定められし時などに安達の二字に定めて猶アダタラとぞよめりけむ。そも安字は灘と同韻なれば舌内聲の例にてンをダに轉し用たるなるべし。河内國の郡名タデヒを丹比とかきタヂマノ國を但馬と書るが如し。丹但ともに舌内聲の字なれば

ンをヂに轉したるなり。後世になりて古言を失ひしより安達の字のままにたやすくアダチと唱ることゝはなれりけむ。さて達字をタラとよむよしは達磨をダ^タルマともダラマともよむが如し。ダルマもダラマも梵語なるを唐山^{トウサン}にてやゝ近き音の字を充て達磨と書るなり。今の安達もこの例なり。又達は寒桓韻の入聲字なれば舌内聲にてタラナの三行に轉し用べき例上にいへるが如し

といひ古義に

アダタラ眞弓とはアダタラてふ地より造り出せる眞弓にていにしへの名物にぞありけむ

といへり。同書に

アダタを安達とかきてラを省けることムザシを武藏とかきてシを省きたる例なり

といへるは疎漏なり。○第三句の絲の字一本に絃とありといふ。さて第三句を略解古義にツラハケテとよめり。卷十四(東歌)に

みちのくのあだたらまゆみはじきおきてせらしめきなば都良波可馬可毛

とあるによれるなり。ツルはいにしへツラといひきと見えて卷二一四八頁にも都良絃取波氣とあり。コトナサムはイヒハヤサムとなり○一首の意は

弓に弦をかけて引く如く女にすみ始めたく思へどももしすみ始めなば世人のう
るさく云ひはやさむ

といへるなり。古義に

思ふ女を吾方に引よせたくは思へどももし引よせたらば云々

と譯せるは従はれず。もとより序歌にあらねばヒカバは語のまゝには譯すべから

ず

南淵の細川山にたつまゆみ弓束級人にしらえじ

南淵之細川山立檀弓束級人二不知所

契沖いはく

南淵山細川山共に大和國高市郡なり。、、南淵は總名にて寛く細川山は別に狭きにや

といへり。南淵山は今稻淵山といふ。高市郡の東南隅にありて飛鳥川の水源なり。其

麓なる稻淵は皇極天皇紀に見えたる南淵先生即南淵漢人請安の居し處なり○弓束は弓の中央なり。即ニギリなり○級は舊訓にマクマデとよみたれどしかよむべき由なし。略解に纏及の誤字かといへり(一本にかく書けり)。さてユヅカマクマデは悉ク成就スルマデといふことを譬へ云へるなり

寄山

いはだたみかしこき山としりつつも吾はこふるか同等不有爾

磐疊恐山常知菅毛吾者戀香同等不有爾

貴人を戀ふる意なる事契沖等のいへる如し。イハダタミノとノを補ひてきくべし。イハダタミカシコキ山は岩ほかさなりてさがしき山なる事略解にいへる如し○結句を舊訓にトモナラナクニとよめるを略解古義にナゾヘラナクニと改め訓めれどナゾフは下二段活なればナゾヘリとははたらかず。従ひてナゾヘラナクニとは訓むべからず。舊訓も未穩ならねどしばらく之に従ふべし(或はナミナラナクニとよむべきか)○菅は管の誤なり

いはがねのこご敷山にいりそめて山なつかしみいでがてぬかも
石金之凝木敷山爾入始而山名付染出不勝鴨

第二句を舊訓にコゴシキヤマニによめるを古義にはコゴシクとよめり。コゴシ、コ
ゴシキとはたらく形容詞なればなほコゴシキとよむべし(卷三二四頁〇参照)一首の
意は契沖が

此歌も貴人を思ひ懸て及びなき事とは知ながら戀しき心に引かれてえ思ひや
まぬに喩たり

といへる如し

佐保山をおほにみしかど今みれば山なつかしも風ふくなゆめ

佐保山乎於凡爾見之鹿跡今見者山夏香思母風吹莫勤

オホニミシカドは氣ヲツケテモ見ナカツタガとなり。オホニミルといふ辭ははや
く卷二及卷三三一〇頁五七四頁に出でたり。〇風フクナユメは古義に
ユメユメ此山ニ風吹荒テ花紅葉ナドヲ散シ亂スナとなり

といへり

奥山のいはにこけむしかしこけど思ふこころをいかにかもせむ

奥山之於石蘿生恐常思情乎何如裳勢武

初二はカシコシの序なり。はやく卷六一〇七二頁にも

奥山のいはにこけむしかしこくも問ひたまふかも念ひあへなくに

とあり。〇略解に「今は貴人をこふるをたとふ」といへる如し

おもひ贖いたもすべなみ(たままだすき)うねびの山に吾しめゆひつ

思贖痛文爲便無玉手次雲飛山仁吾印結

初句は舊訓にオモヒアマリとよめるを古義には一本に思勝とあるに従ひてオモ
ヒガテとよめり。案ずるにガテは敢なればオモヒカネの意ならばオモヒガテズ、オ
モヒガテニなどこそいふべけれ。オモヒガテとはいふべからず。〇一首の意は契沖
が

及なき人をいかにしてがなと思ふを高く大きな山を勝示さして我物と領せ

むとするによするなり

といへる如し

寄草

(冬ごもり)春の大野をやく人はやき不足かもわがこころやく
冬隠春乃大野乎焼人者焼不足香文吾情熾

不足を舊訓にタラヌ略解にアカヌ古義にタラネとよめり古義に従ふべしヤキタ
ラネバカモの意なり○おのが心の思にもゆるを人ありて焼くやうによめるなり
かづらきの高間の草野はやしりてしめささましを今悔拭

葛城乃高間草野早知而探指益乎今悔拭

カヅラキノ高間は葛城山中の高原なりハヤシリテはハヤク領ジテなり○結句は
舊訓にイマヅクヤシキとよめるを略解に

或人云拭は茂の誤かしからばイマシクヤシモと訓べしと是然べし

といへり○探は標の俗字なり

わがやどにおふる土針こころゆもおもはぬ人の衣にすらゆな

吾屋前爾生土針従心毛不想人之衣爾須良由奈

ツチハリは倭名抄に王孫一名黄孫沼波利久佐此間云都知波利とあり古義にはこ
れと和名本草に王孫和名奴波利久佐一名乃波利とあるとに據りて卷一(三四頁)に
綜麻形ノハヤシノ始ノサヌハリノとあるサヌハリとこのツチハリとを同視した
れど卷一なるサヌハリは萩の事なること彼卷にいへる如しさてツチハリは今の
ツクバナ草なりと云ふツクバナ草は莖の上部に四葉めぐり生じ其中より更に莖
出でて其頂に初夏の頃淡黄緑色の四瓣花のさく草なり○ココロユモのモは無意
義の助辭なり古義に

ココロユモは心ノ裏ヨリモと云が如しモは表はさるものにて裏よりも眞實に
思ふよしなり

といへるは従はれず○ココロユモオモハヌ人は汝ヲ心カラ思ハヌ人となり古義
に汝ガ心ノ裏ヨリモ眞實ニ思フ人ハ云々と譯せるは非なり○一首の趣は若き女
を土針にたとへて母などの之を誡めたるなり略解に

我領せしなれば外に心より深くもおもはぬ人にうつるなといふ也
といひ古義に

とかくいひかゝづらふ人ありとも我をおきて人にうつるなと誠むるなり
といへるは余の所見と異なり

つき草にころも色どりすらめどもうつろふ色といふがくるしさ

鴨頭草丹服色取摺目伴移變色登僞之苦沙

スラメドモは摺ラムサレドモなり。イフは人のいふにて我よりいはばキクなり。上
(二三九〇頁及一四〇〇頁)にもキキシといふべきをイヒシ、キカバといふべきをイ
ハバといへる例あり。クルシサはツラサなり。〇女の歌にて逢ヒソメムトハ思ヘド
ソノ人ノ心アダニテ頼ミガタシト聞ク、嗚呼ツラキ事ヨといへるなり。〇僞は稱の
古字

紫の絲をぞわがよる(あしひきの)山たちばなをぬかむともひて
紫絲乎曾吾儀足檜之山橘乎將貫跡念而

山タチバナはヤブカウジなり。古義に

これは人を深くおもひ入てさまざまに心をつくすをたとへたり
といへる如し。〇儀は搓の誤なり

(またまつく)をちのすが原吾^{ツガ}からず人のからまくをしきすが原
眞珠付越能菅原吾不^{ツガ}人^{ツガ}之^{ツガ}芍^{ツガ}卷^{ツガ}惜^{ツガ}菅^{ツガ}原

ヲチは大和高市郡なる越智なるべし

山たかみ夕日かくりぬ淺茅原のち見むためにしめゆはましを

山高夕日隱奴淺茅原後見多米爾標結申尾

譬へたる意明ならねど後日を契る暇なくして別れしを悔ゆる心ならむ
こちたくば左右^{カモ}せむをいはしろの野邊の下草われしかりてば

一云くれなゐのうつし心や妹にあはざらむ

事痛者左右將爲乎石代之野邊之下草吾之刈而者

一云紅之寫心哉於妹不相將有

左右は古義にカモカモとよめるに従ふべし。略解にトモカモとよめるは妄なり。さ
る辭は無し○イハシロノ野べは卷二(一九五頁)にイハシロノ濱松ガエヲとよめる
と同處即紀伊の地名ならむ○女に逢ふを下草を刈るにたとへたる事前註にいへ
る如し。カリテバはカリタラバにて其次にウレシカラマシなどいふことを略せる
なり。前註はここに心附かざる爲コチタクバを略解には人言ノシゲクトモ古義に
は人ノ物イヒノシゲクトモなど釋き曲げたり。一首の意は

いはしろの野べの下草を刈りたらばうれしからむ、さて後もし人言のうるさく
ば如何やうにもしてむを

といへるなり

一云とある三句は此歌につきなし。略解には

是は右と別の歌也。一云と有はいぶかし

といひ古義には

これは右の歌とは別なり。一云とあるはあたらす。これは十一にタマノヲノウツ
シゴコロヤ年月ノユキカハルマデ妹ニアハズアラムとある歌の亂れてこゝに

入しものにやあらむ

といへり

眞鳥すむうなでのもりの菅根をきぬにかきつけきせむ兒もがも

眞鳥住卯名手之神社之管根乎衣爾書付令服兒欲得

眞鳥は仙覺の説に鶯なりといふ。さて略解に

ウナデは大和高市郡雲梯ウナデにていと神さびたる杜にて鶯のすむ故に何となくよ
めるならん。枕詞にはあらず

といへり。このマトリスムは花チラフ秋津ノ野べニ(卷一五八)珠藻カル敏馬ヲスギ
テ(卷三九五)千鳥ナク佐保ノ河門ノ(卷四六六)カハツナクカムナビ河ニ(卷八)などと
同じくて余の准枕辭と名づけたるものなり。又略解に

根は實の字の誤れるにや。山菅の實を以衣に摺らんといふなるべし。上にも妹ガ
爲菅ノ實採ニユク我ヲとよめればかたがた菅の實ならん。カキは詞のみ。是は譬
喩の歌にあらず

といへり。右の説すべてよろし。古義に

カキツケは摺著と云むが如し。眉カキ繪カキなど云カキなり

といへるは従はれず。菅ノ實ヲ衣ニカクとはいふべからぬ事なればなり。○キセムは我ニ著セムなり

(常不^{ツネシラ}△^ス)人國山の秋津野のかきつばたをしいめに見しかも
常不人國山乃秋津野乃垣津幡鴛夢見鴨

常不の二字を舊訓にツネナラヌとよめるを略解には

不の下、知の字を脱せり。ツネシラヌとよむべし

といへり。此説に従ふべし。さてそのツネシラヌは人國の枕辭なり。卷五(九六二頁)にもツネ知ラヌ道ノ長手ヲ云々とあり。カキツバタは女をたとへたるなり。略解に人國山に心をあらせて「他妻を戀て夢に見しをよめり」といへるはいかがをみなべし。生澤邊之まくず原いつかもくりてわが衣にきむ

姫押生澤邊之眞田葛原何時鴨絡而我衣將服

第二句を舊訓にオフルサハベノとよめるを古義に

サキサハノヘノとよむべし。生をサクとよむ例は、十六にヤへ花生トなどあるが如し

といへり。此説に従ふべし。ヲミナベシは准枕辭なり。卷四(七五九頁)にくはしくいへるを見よ。クリテはクリヨセテなり。四五の間に絲ヲ取りテ布ニ織リナシテなどいふことを略せるなり。これと同じく辭を略せる例は卷九に

小垣内の麻を引ほし妹名根がつくりきせけむしろたへの紐をも解かず云々

とあり。○ヲミナベシを姫押と書けるはいにしへ押す事をヘスとも云ひしによりてなり。今もヘシ折ルなどいふヘスなり

君に似る草と見しよりわがしめし野山の淺茅人なかりそね

於君似草登見從我採之野山之淺茅人莫苜根

君ニ似ルは君ニ似テウツクシキとなり。此淺茅を略解古義にもみぢせる淺茅としたれど紅葉と見べき理由なし。シメシは占領セシなり。野山は野及山なり。契沖が野中の山なるべしといへるは従はれず(古義には野山を野上の誤とせり)○卷十九に妹に似る草と見しよりわがしめし野邊の山吹たれかたをりし

といふ歌あり。今の歌と相似たり

三島江の玉江のこもをしめしよりおのがとぞもふいまだからねど

三島江之玉江之薦乎從標之己我跡曾念雖未効

三島江ノ玉江は攝津にあり。三島江のうちの玉江にあらず。玉江といふは江の名。その江三島にあるが故に三島江ともいふなり。卷十一に三島江ノ入江ノコモヲカリニコソ云々とある入江もやがて三島江なり。三島江のうちに更に入江あるにあらず。○イマダカラネドはイマダ其女ニ逢ヒソメネドとなり

かくしてやなほやおいなむみゆきふる大荒木野の小竹シメならなくに

如是爲而也尙哉將老三雪零大荒木野之小竹爾不有九二

カクシテヤとナホヤとヤの言かさなれり。かくヤの重なれる例は卷四七七三頁にかくしてやなほやまからむ近からぬ道のあひだをなづみまゐきて

又卷十一に

かくしてやなほやなりなむ大荒木の浮田の杜のしめならなくに

とあり。案ずるにカクシテヤのヤはヤハの意なり。ナホヤのヤは助辭にてナホヤはタダニといはむに齊し。されば初二はカクシツツ徒ニ老イムヤハとなり。○ミユキフルは准枕辭なり。大荒木野は所在不明なり。契沖は大和宇智郡ならむといへり

淡海ヤのや八橋ヤヒのしぬをやはがずて信アヤトありえむやこひしきものを

淡海之哉八橋乃小竹乎不造矢而信有得哉戀敷鬼乎

アフミノヤのヤは助辭なり。第三句は矢ニ矧グのニを略してヤハグといふ動詞としてつかひたるなり。○信はマコトともサネともよむべし。下に世ノナカハ信アヤトフタ代ハユカザラシとあり。又卷十五にオモハズモ麻許等アリエムヤとあり。又同卷にアガゴトクキミニコフラムヒトハ左禰アラジとあればなり。此外にも集中に核サネワスラエズ、左禰ミエナクニなどあり。さて第四句の意は略解に「マコトニ世ニエ在ナガラフベケンヤといふ也」といへる如し。○契沖及干蔭の矢橋ノ小竹ナレバ矢ニ造ルベキヲ云々と釋けるは非なり。矢橋といふ名を思へるにあらず。古義に矢橋といふにはかゝはらぬなるべし。所はいづくにもあれただ小竹を矢にするを云へるならむ

といへる如し

月草にころもはすらむ朝露に沾スレテ而後ノチ者うつろひぬとも

月草爾衣者將摺朝露爾所沾而後者徙去友

第四句は舊訓にヌレテノチハとよめるを略解にヌレテノチニハとよみ改めたり。卷五(八九六頁)に能彌豆能能知波チリヌトモヨシとあれど今は而の下にはノをよみ添へがたければヌレテノチニハとよむべし。卷八にも飲而後者チリヌトモヨシとあり

わがこころゆたにたゆたにうきぬなは邊にもおきにも依勝ヨリガツマシ益士

吾情湯谷絶谷浮葦邊毛奥毛依勝益士

ユタニタユタニは今いふブラリブラリトなり。ウキヌナハは葦菜なり。ノヤウニといふことを加へて聞くべし。ヘニモ沖ニモはドチラヘモといふことなり。○結句はヨリガツマシジとよむべし(三三五頁以下参照)。ヨリアヘジといふ意なり。○一首の意はおのが心の定まらぬを悲めるなり

寄稻

いそのかみふるのわさ田をひでずとも繩ヒツだに延與ノビもりつつをらむ

石上振之早田乎雖不秀繩谷延與守乍將居

第二句のヲは結句のモリツツにかゝれるなり。但修辭上こゝはテニヲハなき方まされり。ヒツは穂の出づる事にてやがてホイヅのつづまれるなり。繩は舊訓にシメとよめるに従ふべし(略解にはナハとよめり)。○第四句の延與は延豆の誤ならむ(延而とある本ありといふ)。卷十なる

あしひきの山田つくる子ひですともしめだに延與もるとしるがね

の第四句のうつれるにこそ○少女を戀ひてまだきに我物と領せむとする意なり

寄木

白菅の眞野のはり原こころゆもおもはぬ君がころもに摺スリツ

白菅之眞野乃榛原心従毛不念君之衣爾摺

眞野は攝津の地名。シラスゲノは白菅ノ生フルといふ意にて所謂准枕辭なり(卷三

七三八 参照 ○ハリは萩なり ○ココロユモの心は上(一四一一頁なる

わがやどにおふる土針ころゆもおもはぬ人の衣にすらゆな

といふ歌の處にいへる如く相手の心なり。此方の心にあらず。もし此方の心ならば結句は必スラレツとあるべくスリツとはいふべからざればなり。ココロユモのモは助辭にてココロユモオモハヌは心カラ思ハヌといふ意なる事彼歌の處にいへる如し。君ガは俗語の君ガにて君ノにあらず ○結句の摺は古義にスリツとよめるに従ふべし(略解にはスリヌ) ○此歌は女の作にて己を榛原にたとへたるなり

眞木柱 つくるそま人いささめにかりほの爲とつくりけめやも

眞木柱 作蘇麻人伊左佐目丹借廬之爲跡造計米八方

マキバシラは檜の柱なり ○イササメニは率爾ニまたは不圖と譯すべし。卷十に

率爾いまもみがほし秋はぎのしなひてあらむ妹がすがたを

卷十一に

かきつばたにはへる君を率爾おもひいでつつなげきつるかも

古今集物名に

いささめに時まつまにぞ日はへぬる心ばせをば人にみせつつとあり。今は假庵ノ料ニ率爾ニ作リケムヤハ、否心ヲ用ヒテ作レルナリといへるなり。略解古義に契沖がイササカなりといへるに従ひ、其上カリホにつづけてイササカナル借廬ノ爲ニ、イササカナルカリホナドノ柱ノタメニと譯せるは非なり。三四句は寧顛倒して心得べし ○初二はソマ人ノ作ル此眞木柱ハといふ意と迎へ見べし。柚人をもて己にたとへ眞木柱作る事をもて女に物いひをむるにたとへたるなり

むかつをにたてる桃の樹 △成哉等^{ナラム}人ぞ^ムささめきしなが^{ヤト}こころゆめ

向峯爾立有桃樹成哉^ム等人曾耳言爲汝情勤

ムカツヲは向の岡なり。やがて三首下には向岡と書けり。初二は序なり ○第三句は舊訓にナリヌヤトとよみ略解古義共に此訓によれり。さて略解に

ワガ中ノナリヌヤト人モササヤキアヘバツトメテ忍ビテ人ニ知ラルナといふ也

と釋けり。古義も同説なり。案ずるに慎ミテ人ニ知ラルナといふ意ならばナガココロとは云はじ。こゝに元曆校本に成の上に將の字ありてナラムヤとよめり。よりに思ふにこは作者がはやく或女と親みたるに或男のそれを知らで我ハ某郎女ニ思ヲカケタリ、此戀成リナムヤと密に作者に謀りしにてそれを作者が女に告げてタトヒ某ガイヒ寄ルトモ汝ガ心ユメ動クナといひ固めたるなり。○ササメクはササヤクに同じ

たらちねの母が其業桑尙ねがへは衣に著とふものを

足乳根乃母之其業桑尙願者衣爾著常云物乎

其業は舊訓にソノナルとよめり。略解に

其業は借字にて園ニ有也

といひ更に

借字はさまざまに書て定れることなしといへども業をナルに用る事いかが也。

是はソノワザノとよむべき也

といひ、古義は舊訓の如くソノナルとよみて

ナルとは何事にまれその産業をするを云詞なり。業をナリとよむ、即ナルの體言となれるなり。廿卷にサキムリニタタムサワギニイヘノイモガ奈流ベキコトヲイハズキヌカモとあるにても知べし

といへり。案ずるにナルを動詞とせば(即産業トスルといふ意とせば)ソノといふ語は添ふべからず。又ナルを受けてはコガヒといふべく桑とはいふべからず(ソノワザノとよむべからざる事は辨ずるに及ばず)。されば異様にはあれどなほ園在の借字とすべし。○第三句は略解古義共に契沖の「桑の下に子の字の落たるなるべし」といへる(契沖の説は初稿本に見えたり)に従ひてクハコスラとよめり。既にいへる如くソノナルは園在の意なれば第三句はもとのまゝにてクハスラモとよむべし。○四五は略解古義共にネガヘバキヌニキルトフモノヲとよめり。案ずるにネガヘバを母ニネガヘバといふことゝせばキヌトフモノヲといふべくキルトフといひては自他相副はず。おそらくは著は變などの誤にてキヌニナルトフモノヲとよむべきならむ。蠶兒が桑葉を食みて吐きたる絲を取りて衣に織成すを桑葉のやがて衣になるやうにいへるなり。○ネガヘバは心ニ願ヘバといふことなるべし。○一首の

意は桑ノ葉ガ衣ニナラムトハオモヒカケヌ事ノヤウナレドソレスラ成就ストイ
フモノライカデカ我戀ノ成ラザラムといへるならむ

(はしきやし)吾家の毛桃もと繁花のみさきてならざらめやも

波之吉也思吾家乃毛桃本繁花耳開而不成在目八方

ハシキヤシは親愛の意の准枕辭にて吾家にかゝれり。上三句は序なり○第三句は
從來モトシゲクとよみたれどモトシゲミとよむべし。そのミはかの山タカミ河ト
ホジロシなどのミにてサニとはうつさでキニと譯すべきミなり。さて此句は空間
を埋みたるまでにて大切なる辭にあらず。又モトとあるに拘はるべからず。契沖は
やく

本とは木なり。必しも本末の本に限て云にはあらず
といへり○ハナノミサキテナラザラマヤモの辭例は下に

見まくほりこひつつまちし秋はぎは花のみさきて成らずかもあらむ

卷八に

吾妹子がかたみのねぶは花のみにさきてけだしく實にならじかも

とありて意は處によりて小異あり。こゝは言ノミ通ヒテ逢フ事ナカラムヤハとい
へるならむ

むかつをの若楓木しづえとり花まつ伊間爾なげきつるかも

向岡之若楓木下枝取花待伊間爾嘆鶴鳴

第二句の若楓を舊訓にワカカツラとよみ三註共に之に従へり。案するにカツラは
ヲカツラにもあれメカツラにもあれめづべき花あるものにあらず。されば楓は櫻
などの誤字にあらざるか○シヅエトリは我物ト占メテといふ意に外ならず。辭に
泥みて實に下枝を握り持つこと、思ふべからず○花マツ伊間ニの伊は助辭なり。
されば第四句は伊を省きて花待ツ間ニの意と見るべし。例は卷十に春風ニ亂レヌ
伊間爾ミセム子モガモとあり。ナゲキツルカモは花さくことの遅きを嘆くなり○
一首の意は契沖が

童女にちぎりて盛を待に喩へたり

とへいる如し

寄花

いきのをにおもへる吾を(山ぢさの花にか君がうつろひぬらむ
氣緒爾念有吾乎山治左能花爾香君之移奴良武

イキノヲニオモフは命ニカケテ思フといふことなるべし。卷四(七三八頁)にもイキノヲニオモヒシ君ヲユルサクモヘバとあり。ワレヲは我ナルニなり。○山ヂサノ花ニカは略解に

花ニカは花バカリニカといふ意也

といひ古義に

君は山ぢさの花のうつろふやうにはや心がはりしぬらむか

と釋けり。案ずるに山ヂサノは花にかゝれる枕辭にてハナニは卷八に

かすみたつかすがの里のうめの花はなに問はむとわがもはななくに

風まじり雪はふるとも實に不成わぎへの梅をはなにちらすな

とあるハナニとおなじくてアダニといふ意ならむ。ウツロフは心のかはるなり。○

山ヂサは今もチサノ木といふものなりと契沖いへり。チシャノ木は又エゴノ木又

ロクロ木といひて初夏に白きちひさき花のさくものなりといふ

すみのえの淺澤小野のかきつばた衣にすりつけきむ日しらずも

墨吉之淺澤小野之垣津幡衣爾摺著將衣日不知毛

淺澤小野は地名なり。事の成らむを待遠に思ふ意なり。キム日シラズモは著ム日ヲ

イツト知ラズとなり

秋さらば影毛せむとわがまきし韓藍の花をたれかつみけむ

秋去者影毛將爲跡吾蒔之韓藍之花乎誰採家牟

韓藍はこゝにてはカラキと三言によむべし。卷三四七三頁以下にいへる如くベニ

バナなり。○影毛を宣長は

影は移の誤にてウツシモセントとよむべし。ウツスは染る事をいふ也

といへり。案ずるに艶の誤としてニホヒモとよむべし。衣を染むることをニホフと

いへる例は卷六(一一二頁)に岸ノハニフニニホヒテユカムとあり。又艶をニホフ

とよむ例は卷十にサキ艶者サクラバナカモとあり。○童女を我物と占めたりしを

人に取りられしを恨みたる歌なること前註にいへる如し

春日野にさきたるはぎは片枝はいまだふふめり言なたえ行年^ナ
春日野爾咲有芽子者片枝者未含有言勿絶行年

片枝は舊訓に従ひてカタエダとよむべし略解にはカタツエとよめり。カタエダハ
イマダフフメリは女のまだ十分に生長せぬ譬なり○行年は宣長の説に所年の誤
にてソネとよむべしといへり。コトナタエソネは音ツレハ絶エルナとなり。四五の
間にサレドといふことを補ひてきくべし

見まくほりこひつつまちし秋はぎは花のみさきて成らずかもあらむ
欲見戀管待之秋芽子者花耳開而不成可毛將有

表の意は花ダケサイテ實ガナルマイカといへるにて裏の意は折角女ガ生長シタ
ガ我戀ハカナフマイカといへるなり。上一四二六夏なる花ノミサキテナラザラメ
ヤモとは意異なり。略解に

イツカマホニ見テント待々テ見ハ見ツレドモ終ニ事成ズヤアランといふをそ
へたり

といへるは非なり。古義に

タダウハベノ花々シキ事ノミニテ實ニナラズテハ得アルマジキニナホ實ニナ
ラズシテアラムカサテモ本意ニカナハザルコトヤと云々
と釋けるも非なり

吾妹子がやどの秋はぎ花よりは實になりてこそこひまさりけれ
吾妹子之屋前之秋芽子自花者實成而許曾戀益家禮

純然たる譬喩歌なり。古義に「第一二句は序の如くいひたるにて」といへるは非なり。
花は逢初めぬ前、實ニナルは逢初めての後の譬なり○略解に「三首同じ人の歌なる
べし」といへり。げにカスガ野ニの歌は女のまだ十分に生長せぬ程の歌、ミマクホリ
は女ははやく生長したれどまだ逢初めぬ程の歌、ワギモコガは逢初めての後の歌
にて共に萩に寄せたればふと見れば同人の歌の如く思はるれど第一首と第三首
との間に少くとも一二年の間隔あるべきを一昨年も昨年も今年も共に萩によせ
てよまむことは特に萩に寄せてよむべき理由無からむ限、あるべくもおぼえず。否
初に萩に寄せてよみしに因みて中ごろも終もひとしく萩によせてよまむには初

に春日野の萩によそへたれば後にも春日野の萩によそへざるべからざるを第三首にはワギモコガヤドノアキハギとよめり。されば此三首はもと作者不同の歌なるをそをついづるに當りて戀の山踏の路なみに従ひたるまでなり

寄鳥

明日香川七瀬のよどにすむ鳥もこころあれこそ波たてざらめ
明日香川七瀬之不行爾住鳥毛意有社波不立目

ナナセは七とは限らず。ただアマタといふ意なり。所詮セゼノヨドニといはむに齊し。又瀬はこゝにては水のたぎちおつる處より次にたぎちおつる處までの間なり。
(卷五九二頁参照) ○ココロアレコソ波タテザラメを契沖は

鳥の浪を立る羽音を聞てそもとにわなをさし網を張などして捕れば人に知られじとて浪を立ず下に通ふを人に知られじとするに喩へたり
といひ略解には

波タテヌとは其鳥のさわがぬ事にてわが言出るに心あればこそいなともいは
であれといふをたとへたる也

といへり。略解の説に従ふべし。畢竟鳥モ内心捕ラルルコトヲ願ヘルナラムといふ
意なり

寄獸

三國山こぬれにすまふむささびの此鳥まつがごと吾まぢ將瘦

三國山木末爾住歴武佐左妣乃此待鳥如吾俟將瘦

三國山は諸國にあり。今はいつくのか知られず。此の字は前註にいへる如く衍字なり。○吾を舊訓にワガ、略解にワヲ、古義にアレとよめり。舊訓に従ひてワガとよむべし。○マチャヤセムは待疲レムといふことを切言せるなり。略解に「將瘦は借字のみ」といひて待哉將無の意としたるは非なり

寄雲

いはくらの小野秋津にたちわたる雲にしもあれや時をし待たむ
石倉之小野從秋津爾發渡雲西裳在哉時乎思將待

雲ニシモアレヤ時ヲシ待タムは雲ニモアレカシサラバ時ヲ待タムとなり。卷六(一)

○五二頁なる

玉藻かる辛荷の島に島回するうにしもあれや家もはざらむ

の四五と同格なり。時ヲシマタムは行キテ逢フベキ時ヲ待タムとなり。古義に

雲ニテモガナ吾身ノアレカシ、サラバ通路遠キ中ヲモタハヤスク通ヒ行テ逢フ
コトノナルベキヲ、サル雲ニシモアラネバアフベキ時ノ來ルヲ待居ムとなげき
たるなり

といへるは時ヲシマタムを心得誤れり○石倉はいづくにか。山城の愛宕郡にも紀
伊の有田郡にもイハクラといふ地名あり。秋津は吉野の秋津ならむ。契沖は石倉の
小野といふも大和國なり」といへり。然も大和國の某地とは云はず。案ずるに秋津は
吉野のうちの一小區域に過ぎざれば岩倉といふ地たとひ大和國の内なりとも、も
し秋津より遠く離れたる處ならむには吉野ニタチワタルとこそいふべけれ。秋津
ニと限定してはいふべからず。吉野のうちに岩倉といふ處あらばこそ同じ吉野の
うちにて岩倉ヨリ秋津ニ雲ノタチワタルとはいふべけれど吉野の内に岩倉とい
ふ處あるを聞かざる上に二處共に果して吉野のうちにあるならむにはさばかり

遠からずて人の往來の難かる程にもあらざるべければ雲の自由に往來するを羨
むにも及ばじ。更に案ずるにイハ倉ノ小野といひ秋津といへる、空にいひ出づべき
にあらず。さればイハ倉ノ小野といへるは今作者の居る處、秋津は妹の居る處にて
イハ倉は紀伊國有田郡のならむ山城のは吉野とはあまりに隔たれり。おそらくは
秋津宮に行幸ありし程作者は御用にて行宮より紀伊國に下りて其旅先にて行宮
なる愛人を慕ひてよめるならむ

寄雷

天雲に近く光りてなる神のみれば恐みねばかなしも

天雲近光而響神之見者恐不見者悲毛

恐の字を三註共にカシコシとよみたれどカシコクとよむべし。上三句はカシコク
にかゝれる序なり。高貴の人を戀ふる喩なりと契沖のいへる如し

寄雨

甚多毛ふらぬ雨ゆる庭たつみいたくなゆきそ人のしるべく

甚多毛不零雨故庭立水大莫逝人之應知

初句は舊訓にハナハダモとよめるを古義にココダクモに改めたり。なほ舊訓に従ふべし。さてハナハダモならば甚毛にてよかるべきを多の字を添へたるはなほココダクモを幾許雲と書きセキトセクトモを雖塞々友と書きシメシヨリ、コヒヌベシを從標之、可戀奴と書ける如し。○ニハタツミは雨後のたまり水をいふ。イタクナユキノはイタクナ流レソなり。○一首の意は略解に
逢見る事のすくなきに人の知るばかり色にいづなといふをそへたり
といへる如し

(久堅の)雨にはきぬをあやしくもわがころもではひる時なきか

久堅之雨爾波不著乎怪毛吾袖者干時無香

雨ニハ著ヌヲは雨降ニ著ルニアラヌヲとなり。ナキカはナキカナなり。○略解に
涙にほしあへぬをよめるのみにて譬喩歌にあらず
といへる如し

寄月

みそらゆくつくよみをとこ夕さらず目には見れどもよるよしもなし

三空往月讀壯士夕不去目庭雖見因縁毛無

ツクヨミヲトコは月を人めかしたるなり。卷六(一〇九七頁)にもアメニマヌツクヨミヲトコとよめり。○夕サラズは每晚なり。はやく卷三四四八頁にも見えたり。ヨルヨシモナシは近ヅク由モ無シとなり。○古義に

月のおもしろくなつかしきをよひよひ目には見はすれども親しくよりそひて
かたらふ爲方もなしとなり

といへり。君ハ恰ソノ月ヨミ男ノヤウナリといふことを副へて聞くべし

かすがやま山たかからし石上菅根みむに月待難

春日山山高有良之石上菅根將見爾月待難

三四句は舊訓にイハノウヘノスガノネミムニとよみたるをさては意通せずとて
宣長は菅根を舊郷の誤としてイソノカミフルサトミムニとよめり。案ずるに石上
は卷二(二二〇頁)に磯之上爾オフルアセミヲ、卷三(五五二頁)に磯上爾ネハフムロノ

木とあり又卷十九に

磯上のつままを見れば根をはへて年深からしかむさびにけり

とあるによりてイソノウヘノとよむべし。そのイソノウヘはやがて石上の義なり。右のツママの歌の題辭に過澁溪崎見巖上樹歌とあるを見て然るを知るべし。○菅根はもとのまゝにて可なり。ただ菅といひてよきをスガノ根といへるは草を草根といひ眞木を眞木の葉といへる類なり(一三二〇頁參照)はやく略解にかゝる所に菅ノ根とよめる歌集中に多し。根にはやうなけれどただいひなれたるによりていへるのみにて菅根とて菅の事なるべくおぼゆといへり。○結句は略解に従ひて月マチガテヌとよむべし。月マチガテヌハのハを略せるなり。古義に月マチガタシとよめるはわろし。○一首の意は石上に生ひたる菅を見むと思ふに月の出づることの遅きは春日山の高き故にや

といへるなり

闇の夜はくるしきものをいつしかとわがまつ月毛はやもてらぬか

闇夜者辛苦物乎何時跡吾待月毛早毛照奴賀

イツシカトはマツにかゝれり。月毛は月波の誤なるべし。早毛の毛のうつれるならむ考には月之の誤ならむといへり。テラヌカは照レカシなり。○契沖が

闇夜は逢はぬ程の心にとへ待月は待人に喩ふ

といへる如し。古義の釋の如くば譬喩歌とはいふべからず

朝霜のけやすき命たがために千歳もがもとわがもはなくに

朝霜之消安命爲誰千歳毛欲得跡吾念莫國

右一首者不有譬喩歌類也。但闇夜歌人所心之故並作此歌。因以

此歌載出此次

一首の意は

朝霜ノ如ク消エヤスキ命ヲ千歳ニモガナトワガ思フハタガ爲ナラナクニ

といへるにてタガ爲ニ云々は上一三九八頁なる

みな底にしづく白玉たが故に心つくしてわがもはなくに

又古今集なる

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに亂れむとおもふ我ならなくに
の第三句以下と同格にて餘人ノ爲ナラズ其許ノ爲ナリといふ意なり
左註について略解に

譬喩の歌にはあらざれども闇夜の歌よめる同人の歌なればこの次でにのする
といふ也。心は思の誤か

といひ古義には

略解に心は思の誤かといへるはわろし。所心と云こと集中におほく見えたるを
や

といへり。案ずるに此歌は譬喩歌にあらざるのみならず寄月歌にもあらざれば他
の三首と並べ擧ぐべきにあらず。さて闇夜歌人は闇夜ノ歌ノ人とよみて闇夜ノ歌
ヲ作リシ人といへるなり。所心之故は所心ノ故アリテとよむべきか。所心は卷十七
の初に於是悲傷羈旅各陳所心作歌とあるを始めてあまた見えたり。所思所感など
の意なり。並作此歌は此歌ヲモ作リツの意にて並はモに當れり

寄赤土

やまとの、宇陀の眞赤土のさに著△そこもか人のわをことなさむ

山跡之宇陀乃眞赤土左丹著曾許裳香人之吾乎言將成

ハニは今のネバツチなり。赤土とも黄土とも書けり。○略解に

サは發語。赤土の色のしみつく也。ちかく其人に觸れなばそれをも人のいひたて
んといふ也

といひ古義に

もし眞赤土の衣に着たらばと云なり

といへり。案ずるに初二は序。サニツクのサは添辭にてニツクは似附なり。ニツクと
いふ語は卷四(八二〇頁)にも見えたり。序よりは土著とかゝれるなり(はやく考にワ
レツノ人ニ似ツカバ云々と釋せり)○こは女の歌にて

もし君の癖に似附かばそれにつけても人の我をいひたてはやさむか

といへるなり。女は往々男の癖に似附くものなり。○四五の辭例は卷四(六四二頁)に
秋の田の穂田のかりばかかよりあはばそこもか人のわをことなさむ

とあり○著の下に者をおとせるなり

寄神

ゆふかけて祭マツルみもろのかむさびていむにはあらず人目おほみこそ

木綿懸而祭三諸乃神佐備而齋爾波不在人目多見許増

祭を古義にイハフとよめり。舊訓のまゝにマツルとよみて可なり。ユフは幣なり。ミ

モロは神社なり○略解に

本○初二はカムサビといはむ序のみ。サダ過タリトテイトフニハアラズ、人目ノ多ケレバコソ通ハネといふなるべし

といひ古義に

カムサビテは御室にいつきまつる神のかうがうしき由にいひ下して古めきたるよしにいひつづけたり。人ヲフルキモノニシテと云意なり。イムニハアラズは神をばいみつゝしみ畏れさくればいへるにて人ヲフルキモノニシテ神ヲオソレ避クルゴトクトホザクルニハアラズと云ふなり

といへり。案ずるに序は上三句にてイムにかゝれるなり(考にも神サビテまではイ

ムといはん序なりといへり。而してイムは序よりのつづきにては忌慎む意下へつづきては忌嫌ふ意なり。なほいはば三四の間にイマルゴトクといふことを補ひて聞くべし。略解の説はカムサビテを卷四(八一二頁)なるカムサプトイナニハアラズのカムサブと同例としたるなれど年タケタリトテといふことをカムサビテとは云ふべからず(カムサビタリト又はカムサプトとこそいふべけれ)。又古義にカムサビテを人ヲフルキモノニシテと譯せるは自他の混同を忘れたる説なり○さて此歌は女の歌とおぼゆれば人目オホミコソは人目ノオホサニコソ得逢ハネと譯すべし(略解にカヨハネと譯せるは男の歌と思へるなり)

ゆふかけて齋イム此神社モツメこえぬべくおもほゆるかも戀のしげきに

木綿懸而齋此神社可超所念可毛戀之繁爾

第二句を契沖はイムコノモリモとよみ雅澄はイハフコノモリとよめり。契沖の訓によるべし。かならずモといふ辭あるべき處なればなり。さて上四句は無理不法ナ事ヲシテマデモ逢ヒタシト思フといふ意なり。モリヲコユとは杜ノイガキヲ越ユとなり○契沖いはく

此歌上と問答せるやうに見ゆる歟

と。げに贈答なるべし。いにしへの答歌には贈歌の意を承けずして辭を受けたる例あることはやくいへる如し(四〇頁、四九五頁、四九九頁、七五七頁などを見べし)

寄河

たえずゆく明日香の川の不逝者故しもあるごと人の見まくに
不絶逝明日香川之不逝有者故霜有如人之見國

第三句は舊訓にヨドメラバとよめり。契沖は初句に不絶逝とあるを思へばユカザラバとよむべきかといへり。これも一説なり。さて上三句は通路ノトダエナバといふことの譬なり。古今集戀四に

たえずゆくあすかの川のよどみなば心ありとや人のおもはむ
とあるは今の歌のかはれるなり

因にいふ。古今の歌の第四句一本に心アルトヤとあり。かくあるにつきて遠鏡に「アルトヤはアルゴトヤのゴのおちたるなり。アルトヤにては語と、のはず」といへるは非なり。アルトヤは略辭格なり。即アルナリトヤといふべきナリを省ける

なり。さてアリトヤとアルトヤといづれかまされるといふにアルトヤとあらむ方まされり。思ふにもと有トヤと書きたりしをよく思はでアリとよみうつししが世に廣まりしならむ

明日香川せぜに玉藻はおひたれどしがらみあればなびき不相

明日香川湍瀬爾玉藻者雖生有四賀良美有者靡不相

シガラミは障碍の譬なり。不相を略解古義にアハナクニとよみたれどニをよみ添ふるに及ばず。卷四(八二九頁)にも

春のあめはいやしきふるに梅の花未咲久いとわかみかも

とあり。さてアハナクは逢ハヌコトヨとなり

廣瀬川袖つくばかり浅きをや心深めてわがおもへらむ

廣瀬川袖衝許浅乎也心深目手吾念有良武

初二は序なり。廣瀬川は大和にあり。大和川の支流にて磯城郡と北葛城郡との界を流れたり。袖ツクバカリは徒涉スルニ僅ニ長キ袖ノ袖口ノ漬クバカリとなり。○ア

サキヲヤは心淺キ人ヲヤとなり。古義に「人の我上を思ふ心の淺きをやと云なり」といへるは非なり。上一三四七頁にウノハナ以之カナシキガ手ヲシトリテバとあり。又卷十四に

にほどりのかつしか早稲をにへすともそのかなしきを外にたてめやもとあるカナシキはカナシキ人といふことなれば今と同例なり。○上三句は廣瀬川ノ袖漬クバカリ淺キガ如ク心淺キ人ヲといへるにて四五は古義に吾ハナホ心ニ深ク思ヒテアラムカと譯せる如し

はつせ川流水沫之たえばこそわがもふ心とげじと思はめ

泊瀬川流水沫之絶者許曾吾念心不遂登思齒目

第二句は舊訓にナガルミナワノとよめり。然るに雅澄は

今おもふに沫は脈の誤なり、ナガルミヲノとよむべし。上に泊瀬川流水尾之云云と見えたり。これはわがはじめて考へ得たるなり

といへり。之に従ふべし。○すこしこみ入りたる歌なれば之を簡單にする爲まづトオモフといふことを省き見べし。トオモフといふことは無くても同じ事なればな

り。之を除けばハツセ川ナガルルミヲノ絶エバコソワガ思フ心トゲザラメとなりて卷六なる

泉河ゆく瀬の水のたえばこそ大宮どころうつろひゆかめ

と同格となるなり。更に簡單にする爲に裏を表にかへして譯すればハツセ川ノ流ノ絶エザラム限ワガ思フ心ノ遂ゲザル事無カラムとなり。さてトグは卷四(六六六頁)なるワガセコシトゲムトイハバのトゲムとおなじくて中止のうらなり。されば一首の意は畢竟泊瀬川ノ流ノ絶エザラム限我心ハカハラジといへるなり

なげきせば人しりぬべみ(山川の)たぎつところをせかへたるかも

名毛伎世婆人可知見山川之瀧情乎塞敢而有鴨

ナゲキスルはため息をつくこと、人シリヌベミは人が知ルベキニヨリテとなり。タギツはハヤルにてセカへはセキアへの約なり

みごもりにいきづきあまり早川の瀬にはたつとも人にいはめやも

水隠爾氣衝餘早川之瀬者立友人二將言八方

契沖は

初の二句は忍びに嘆ずる喩なり。次の二句は早川の瀬のたけき水に疲れて立つ事はいと安からぬ事なるをそれがやうなる思を堪忍びて苦しくとも人にかくとはいはじとなり

といひ古義には

ミゴモリはしのびかくすにたとへたり

といひ第三句以下を

早川の瀬の如くたぎる心のたとひわきかへるとも人にそれといはむやは云々と釋けり。案ずるにイキヅギアマリはやがて長息シ足ヲヌなり。さて上四句は淵にくぐりたりし漁人の水より出でて長息しつつ早川の苦しき瀬に立てるにおのが境遇を譬へたるなり。ミゴモリニは水ニ潜リテといふ意なり。卷三(三九四頁)なる夜ゴモリニイデクル月ノ光トモシキの夜ゴモリニが夜ニコモリテといふ意なると同例なり。○人ニイハマヤモは我ハカカル境遇ニアリト人ニ言ハムヤハとなり。もとより忍びたる戀なればなり

寄埋木

(眞^ガ鉦^チもち)弓削の河原のうもれ木のあらはるまじき事等あらなくに眞鉦持弓削河原之埋木之不可顯事等不有君

弓削は河内の地名。今の八尾附近なりといふ。上三句は序。其中にて又初句はユゲの枕なり。カナは今いふカンナなり。○結句の等の字諸本に爾とあり。今ニといふべきをいにしへトといへる例あれば誤字とするに及ばず。略解にも

卷三ナカナカニ人トアラズバ酒ツボニ、卷十二ナカナカニ人トアラズバ桑子ニモとよめる類にて爾といふべきをトといへるもあり

といへり。卷三(五四一頁)なる世ノナカハムナシキ物跡アラムトゾのモノトもモノニなり。卷八にも

をとめらが、かざしのため爾、みやびを、かづらのため等

とありてニとトとを對用せり。字音辨證(下卷十頁)に等にニの音ありといへるは従はれず。○一首の餘意は古義に

もしあらはれなば其時いかにかせむとなり

といへる如し

寄海

大船に眞梶しじぬきこぎでにしおきは深けむしほはひぬとも
大船爾眞梶繁貫水手出去之奥將深潮者干去友

フカケムは深カラムなり。三註共にコギデニシを作者自身の事としたれど他人の上をいへる辭とおぼゆ○人の前途をおぼつかなき意とはきこゆれどくはしき事は知るべからず

伏超^{フシゴエ}ゆゆかましものを間守^{マモル}爾^ニうちぬらされぬ浪よまずして

伏超^{フシゴエ}従去益物乎間守爾所打沾浪不數爲而

フシゴエは略解に

土左國安藝郡海邊の山道に今伏越といふ地名有と彼國人いへり。是にや

といひ古義に

中山嚴水我土左國安藝郡に伏超^{フシゴエ}と云る坂あり。そは飛石はね石ころころ石など

云て名高き難所を行過て此坂を超えることなり。此坂いとけはしくして立てあゆみがたければ伏超と云なるべし。此伏超の山の岬は海に臨みて今は行かよふべき處にあらず。いにしへは浪間をうかがひて道行人もかよひしにやあらむ。扱此歌によめるは土左國とも定めてはいひがたし。總て地名はいづくにも同じきがあるものなればなり。されども伏超と云る處はいづくにてもかゝる所なるべき據とはなりぬべしと云り

といへり。げに立ちては越えがたき程さがしき山の名ならむ。葛城山中(河内國南河内郡平石村字伏越)にも伏越峠といふがありとぞ○第三句を略解にヒマモルニとよみて「打寄る波のひまをうかがひて通り行に」と釋し古義にはマモラフニとよみて「浪の打よせ引とる間をうかがふにの意なり」といへり。古義の如くマモラフニとよむべし。抑マモルには間守と目守との別あり(はやく一三八八頁にいへり)。今は卷十一なる人ゴトノシゲキ間守リテアヒヌトモまた人ゴトノシゲキ間守ルトアハズアラバまた人間守リテアシ垣ゴシニワギモコヲアヒミシカラニなどのマモルとおなじくて間守の方なり。さればマモラフニは浪ノ間ヲウカガフニとなり○結

句を略解には波ノヒマヲウカガヒソコナヒテと譯し古義には

ナミヨムは浪の數をかぞへて打よせたる浪の引たる間をうかがふことなり。さてこゝはふつに浪をよまざりし詞つきなれどさにはあらず。浪をよみはしつれどもよくせずしてかぞへそこねて浪に沾されたるを謂なり

といへり。げに此等の説の如くなるべし。○さて初二の意はカクト知ラバタトヒサガシクトモ寧伏越ノ方ヲユクベキヲとなり

石灑シサレきしのうら廻マによする浪邊ナミノヘに來依者キヨバか言のしげけむ

石灑岸之浦廻爾緣浪邊爾來依者香言之將繁

初句を舊訓にイハツソグとよみ契沖はイハツソギとよめるを略解に

灑は隱の字の誤にてイソガクレなるべし

といひ古義は之に據りてただイソガクリと修正せり。案ずるに字はもとのまゝにてイソサラシとよむべし。上(一二七二頁及一二七七頁)にも

大伴の三津の濱邊を打曝ウチサラシよりこし浪のゆくへしらすも

すみのえの岸の松が根打曝よりくる浪のおとのさやけさ

とあり。さてそのイソサラシはただ裝飾にいへるのみ。○キシノウラミは上(一二六九頁)にも

くやしくもみちぬるしほかすみの江の岸の浦回ゆゆかましものを

とあり。岸下の曲浦なり。○上三句は序なり。○第四句を舊訓にヘニキヨレバカとよめるを古義にキヨラバカに改めたり。之に従ふべし。コトノシゲケムは人言ノ繁カラムとなり。さてヘニ來ヨラバは古義に思フ人ノ邊ニ依近ヅキタラバと譯せる如し。ユキヨラバといはではかなはぬこゝちすべけれど卷一(一一一頁)なるヤマトニハナキテカクラムヨブコドリヨブコドリの處にいへる如く又下なる世ノナカハマコト二代ハユカザラシの處にいはむ如くいにしへクルとユクとは通用せしなり

磯の浦にきよる白浪かへりつつ過スギレ不勝者ハズカシ雉トビにたゆたへ

磯之浦爾來依白浪反乍過不勝者雉爾絕多倍

カヘリツツを略解には歸リナガラと譯し古義には立カヘリ立カヘリと譯せり。案ずるにこのカヘリは沖に歸るにあらず。岸にかへるなり。立戻リ立戻リシテと譯すべし(即古義の説の如し)○第四句を契沖は

スギシカテズバと讀て過アヘズバと意得べし

といひ略解古義にはスギガテナクハとよめり。案ずるにこゝはスギガテズバとこそいふべけれスギガテナハといふべき處にあらねばスギガテナクハとはいふべくもあらず。然らば契沖の訓によるべきかといふにカテと主動詞との間にシを挿める例あるを知らねばしばらくスギシアヘズバとよむべし。意は過ギカネナバといはむに齊し。○結句の雉を略解に

雉は岸の借字ともすべけれどさはあらず。宣長云。雉は涯の誤也。卷四にも涯キシノツカサと書り。といへり

といへり。然るに古義には此説を斥けて

雉は岸の借字なるべし。雉をもいにしへはキシとシを清て唱へしなるべしと吾徒南部嚴男云り。金葉に雨フレバキシモシトトニ成ニケリカササギナラバカカラマシヤハとあり。キシのシを清て唱へし故にこれも岸を雉によせたるにや。といへり。案ずるに金葉集なる歌は連歌の部に出でて

鳥を籠に入れて侍けるがよこ雨にぬれけるをみて 雨ふればきじもしととな

りにけり かささぎならばかからましやは

とあり。シトトは物のいたく濡るゝ形容なるを鳥の名にシトトといふがあれば雉の雨にぬれたるを戯に雉ガ鶉ニナツタと云へるにて、末の句の方はカササギナラバ笠トイフ名ガツイテラルカラ濡レハスマイニといへるなり。されば雅澄が「岸を雉によせたるにや」といへるはあらぬ言なり。さて今は宣長の説に従ひて涯の誤字とすべし。碩鼠漫筆卷十五(二六六頁)にはこゝに岸を雉と書けるを萬葉集の時代にはやくキギシを略してキシといひ又そのシを清みて唱へし證とせり。かゝる説を立つるにはなほ傍證を要す

あふみの海ナミカシコミ浪恐等風まもり年はやへなむこぐとはなしに

淡海之海浪恐登風守年者也將經去擗者無二

第二句を舊訓にナミカシコシトとよめるを古義にナミカシコミトに改めたり。古義に従ふべし。カシコミトのトは例の省きて見べきトなり。さればナミヲカシコミといはむにひとし。○風マモリは名詞にあらず。風ヲ守リツツの略なり。その風マモリは風間を待つなり。はやく卷三四六九頁にも見えたり。○年ハヤヘナムは年ハ經

ナムカとなり。コグトハナシニは漕ハセズテなり

朝なぎに來よる白浪みまくほり吾はすれども風こそ不令依

朝奈藝爾來依白浪欲見吾雖爲風許增不令依

朝ナギニといへると來ヨル白浪とあると矛盾せるに似たれどこは和ギタル朝ノ海ニ來寄ラム白浪ヲといふ意なり○又結句のヨセネはただ不依と書きてあるべく令の字を加ふるに及ばざる如くなれどこはトヨムルの意なるトヨムを令動(卷六六頁)令響と書けると同例なり

寄浦砂

(紫)名高の浦の愛子地袖のみ觸てねずかなりなむ
紫之名高浦之愛子地袖耳觸而不寐香將成

玉勝間卷九(全集第四の二一一頁)に

名高の浦は名草郡(○紀伊)にて今はそのわたり海士郡に入れり。今も名高とも名方ともいふ里にて藤白のすこし北の方なり。ある時若山にて人々物語しけるつ

いでに一人がいふやう名高の里中にむらさき川といふちひさき川のあるなりといふ。、、もしこれ古き名ならばかの萬葉にムラサキノ名高とつづけたるはいにしへこのわたりを村崎などいひてそこなる名高の浦といへるにはあらかじか

といへれどもムラサキノはなほ枕辭にてかのムラサキ川は本集の歌によりてつきたる名ならむ○第三句を舊訓にマナゴヂニとよみ古義にマナコヅチとよめり。文字に誤なくばマナゴヅチとよむべし○四五は袖ヲ觸レルダケデ寢ズニシマフ事カとなり○上三句は序なる如く見ゆれどマナゴヅチより袖ノミフレテにかゝる因縁なし。案ずるに第三句はもと愛子西とありしを次の歌の第三句のうつりて愛子地となれるならむ。さて序は初二句のみにてマナゴは序よりつづきては砂、主文にては人のいつき娘なり○ソデノミフレテの語例は卷十一にしろたへの袖觸てよりわがせこにわがこふらくはやむ時もなしとあり

とよ國のきくの濱邊の愛子地眞直にしあらば何如なげかむ

豐國之間之濱邊之愛子地眞直之有者何如將嘆

豐前國の企救濱なり○愛子地を略解には舊訓に従ひてマナゴヂノとよみて砂道の意とし古義にはマナゴヅチとよみて織沙のある地をいふといへり訓釋ともに古義に従ふべし○何如は舊訓にナニカとよめり古義にイカデに改めたれど集中にイカデといふ辭を用ひたる例證なき事卷二(一五六頁)にいへる如くなれば舊訓の如くナニカとよむべし○上三句は序なり第四句は汝ガ心ニ邪ナル所ナクバとなり○間は聞を誤れるなり

寄藻

塩みてば入流礮の草なれや見らくすくなくこふらくのおほき

留滿者入流礮之草有哉見良久少戀良久乃太寸

入流を從來イリヌルとよめりただイルといひては言足らざるによりてイリヌルといへるにて古今集秋下なる

みる人もなくてちりぬるおく山のもみぢはよるのにしきなりけり

のチリヌルなどとひとしきか更に案するにこゝはカクルルとありて然るべき處なれば入流は入没などの誤にあらざるか○契沖いはく

寄藻と題したれば草と云は藻なり

と○草ナレヤは草ナラメヤ否草ナラヌニとなり(卷六三頁○五参照)草ナレバニヤの意にあらず○ミラクは見ルコトガ、コフラクは戀フルコトガとなり

おきつ浪よするありそのなのりそ者こころのうちに疾跡成有

奥浪依流荒礮之名告藻者心中爾疾跡成有

古義に第三句の者を之の誤としてナノリソノとよめり○結句は舊訓にトクトナリケリとよめるを契沖は「有の字をケリとよむべき理なければ」とてヤマヒトナレリに改め考には疾跡を靡の誤としてナビクナリケリとよみ古義には

中山巖水次の歌によるに疾跡の二字は靡の一字を誤成は來とありけむを草書にて誤りさてもとは有來とありしを下上に寫誤れるならむさらばナビキタリケリなるべしと云り今按に成は相か合かの誤なるべし靡相有とありしならむか

といひ又「本の句は序なるべし」といへり。案ずるに第三句の者はなほもとのまゝにてハとよむべく疾跡成有は念跡成有の誤としてモヘトナリケリとよむべし。有の字はケリともよむべし。はやく古義此卷ミムロノ山ハモミヂ爲在の下に

在有などの字ケリと訓べき例集中に多し。此下に沾在哉十卷に開有可毛また月經在また雪曾零有十一に猶戀在また塞耐在また後悔在また乘在鴨などありといへり。○一首の意は「このナノリソは心ノ内ニ思ヒテアレ、ユメ人ニナ告リソといふ名なりけり」といへるならむ

(紫)名高の浦の名のりその磯になびかむ時まつ吾を
紫之名高浦乃名告藻之於磯將靡時待吾乎

吾ヲは上一二四五頁なる

はつせ川しらゆふ花におちたぎつ瀬をさやけみと見にこし吾を

のワレヲにおなじくてワレゾといふ意なり。○一首の意は略解に「妹が近くよりなびかん時を待にそへたるのみ」といへる如し。古義に「本句は序にて云々」といへるは非なり

ありそこす浪はかしこししかすがに海の玉藻のにくくはあらぬを
荒磯超浪者恐然爲蟹海之玉藻之憎者不有手

アリソコス浪は契沖のいへる如く人言のこちたきを譬へたるなり。略解古義に女の父母を譬へたりとせるは従はれず。○シカスガニは然オソロシケレドとなり。○手は乎の誤なり

寄船

ささ浪のしが津の浦のふなのりにのりにしころ常わすらえず
神樂聲浪乃四賀津之浦能船乘爾乘西意常不所忘

ササナミは郷名。シガ津は又大津といふ。但今の天津市よりは北方に當れりといふ。○上三句は序なり。大津ノ浦ニテ船乗スルヤウニといふ意なり。○第四句の語例は卷二(一四九頁)に

あづま人ののさきのはこの荷のをにも妹がこころにのりにけるかも

卷四(七六八頁)に

ももしきの大宮人はおほかれどころにのりておもほゆる妹

とあり。卷十以下にも妹ガ心ニノリニケルカモ思妻ココロニノリテ、ココロニノリテココバカナシケなどよめり。妹が此方の心に乗ると此方の心が妹に乗るとの別あり。今の歌はノリニシココロとあれば此方の心が妹に乗りしなり

(ももづたふ)八十の島廻をこぐ船にのりにしこころ忘れかねつも

百傳八十之島廻乎撈船爾乘西情忘不得裳

上三句は序なり。第三句の下に乗ルガ如クといふ辭を補ひて見べし。上(一四四二頁)なる

ゆふかけてまつるみもろのかむさびていむにはあらず人目おほみこそ

と同例なり(これもイマルル如クといふことを加へて聞くべきなり)

島づたふ足速の小舟風まもり年はや經なむあふとはなしに

島傳足速乃小舟風守年者也經南相常齒無二

上(一四四五頁)に

あふみの海浪かしこみと風まもり年はや經なむこぐとはなしに

といふ歌あり。アバヤは略解に「疾行舟を云」といへり

みなぎらふおきつ小島に風をいたみ船よせかねつ心はもへど

水霧相奥津小島爾風乎疾見船縁金都心者念杼

ミナギラフは水煙のたつ事○小島はラジマともコジマともよむべし○ココロハはココロニハなり(卷四五六二頁参照)心ニハ船ヲ寄セタク思ヘドとなり

殊放者おきゆ酒嘗湊よりへつかふ時にさくべきものか

殊放者奥從酒嘗湊自邊著經時爾可放鬼香

初句は略解にコトサケバとよめるに従ふべし。古義にコトサカバと改めたるは非なり。自動詞サク(四段活)他動詞サクル(下二段活)なればなり(卷二二二頁○及卷三三五頁参照)○第二句も契沖のサケナムとよめるぞよろしき(古義にはサカナムとよめり)。さてコトサケバは如サケバなり。如は外の語の下につづく時はゴトと濁りて唱ふれど、さらぬ時はコトと清みて唱ふべきなり。古義に「かくの如く吾を遠ざけむとなら

ばの意なり』といへる如し。古今集にコトナラバとあるもカクノ如クナラバなり○
ヘツカフは卷四(七三六頁)に

たゆといはばわびしみせむとやきだちのへつかふことはよけくや吾君

とあり。契沖が『岸につくを云』といへるは此歌にはよく當れど卷四なるには當らず。

されば契沖も『第四にヤキダチノヘツカフとよめるは詞は同じやうにて意殊なり』

といへり○譬喩の意は略解に

いまだ事成らぬ程には避すしてや、事なるべく成て避んものかといふをたとへたり

といへる如し。但避ズシテ、避ンノ代に遠ザケズシテ、遠ザケムといふべし

旋頭歌

みぬさとり神のはふりがいはふ杉原、たきぎきりほとほとしくに手斧
とらえぬ

三幣帛取神之祝我鎮齋杉原燎木伐殆之國手斧所取奴

神の字を舊訓にミワとよめるを古義にカミに改めて『神をミワとよむは大神にか
ぎりたることとおぼゆ』といへり。神をミワとよむは大神に限らねどこゝはなほカ
ミとよむべし。三輪とは限るべからねばなり○イハフはイツクにおなじ。ホトホト
シクニ云々はスデノ事ニ手斧ヲ取上ゲラレル所デアツタとなり○いにしへ盜伐
者を罰するには斧を取上ぐる例なりきと思ひ。宇治拾遺物語卷三にも

今は昔木こりの山守によき○小斧を取られてわびし心うしと思ひてつら杖う
ち衝きて居りける。山守見て『さるべき事を申せ。取らせん』と云ひければ

あしきだに無きはわりなき世の中によきを取られてわれいかにせむ

とよみれば山守返しせんと思ひてこここと呻きけれど得せざりけり。さて
よき返し取らせてければうれしと思ひけりとぞ。人はただ歌をかまへてよむべ
しと見えたり

とあり○以上譬喩の歌なり

挽歌

雜挽

(鏡なす)わが見し君を阿婆の野の花橘の珠にひろひつ
鏡成吾見之君乎阿婆乃野之花橘之珠爾拾都

代匠記に鏡ノ如ク飽カズ我見ツル君といひ略解に鏡ノ如ク日々ニ我見シ君といひ古義に鏡ノ如ク大切ニワガ見シ君といへる皆非なり。鏡ナスは見シの枕辭なり。見シ君は卷四(七)〇八頁なるミシ人ノコトドフスガタオモカゲニシテとおなじくて妹背ノカタラヒセシ君といふことなり。〇阿婆の野を契沖は

皇極紀の童謠にもヲチカタノ阿婆努ノキギシとよめり。延喜式に大和國添上郡に率川阿波神社あり。もし春日野のつづきに阿婆野ありて彼處に坐す神にやといへり。〇タマニはタマトなり。シラユフハナニオチタギツ(卷六五頁)〇二瀧ノミナワニサキニケラズヤ(同七頁)〇二ヨシ野ノ河ノキリニタチツツ(同九頁)〇二などと同例なるニなり。花タチバナノタマとは橘の實の小さき程をいふ。〇四五の意は略解に『火葬して骨を拾ふをいへり』といへる如し。阿婆野にて火葬せしにて其野に橘樹あれば其實ヲ拾フヤウニ骨ヲ拾ヒツといへるなり

あきつ野を人のかくれれば朝蔀君がおもほえてなげきはやま

蜻野叫人之懸者朝蔀君之所思而嗟齒不病

アキツ野は吉野にあり。〇人ノカクレバは『言に懸て云なり』と契沖のいへる如し。アキツ野ノ事ヲ人ノ語レバとなり。其野にて妹を火葬せしなり。〇略解に

朝マキシは火葬にしたる灰をあしたに蔀散らす事にて宣長委しく考へたりといへり。下にも清キ山ベニマケバチリヌルまたコノ山カゲニマケバウセヌルとあればマクはさもあるべけれど、朝といふことおちつかず。案ずるに朝は吾の誤にあらざるか。〇オモホエテはシノバレテなり(卷六一〇三二頁及七六頁)参照。〇叫は叫の俗體なり

秋津野に朝るる雲の失去者前裳今裳なき人おもほゆ

秋津野爾朝居雲之失去者前裳今裳無人所念

去者を舊訓にユケバとよめるを古義にヌレバに改めたり。こは朝キル雲ノウセユクヲ見レバ火葬ノ烟ノウセユキシガ思出サレテ云々といふ意なればなほユケバ

とよむべし略解古義の説共に非なり○第四句を舊訓にムカシモイマモとよめるを契沖は「キノフモケフモとよみて今の歎きに合すべきにや」といひ略解古義ともに契沖の改訓に従へり契沖は新喪と心得てキノフモケフモと改訓したるなれど新喪と見ざるべからざる理由なしさればなほムカシモイマモとよむべしさてムカシモイマモは當時ハ勿論今トイヘドモとなり

(こもりくの)はつせの山に霞たちたなびく雲は妹にかもあらむ

隱口乃泊瀬山爾霞立棚引雲者妹爾鴨在武

卷三(五二三頁)にも人麿のよめる

こもりくのはつせの山のやまのまにいざよふ雲は妹にかもあらむ

といふ歌あり略解古義に火葬の煙を雲霞に見なしてよめりといへる如し○アラムとアルラムと通用することははやくいひつ(一〇二四頁参照)

たはごとかおよづれ言哉(こもりくの)はつせの山にいほりせりとふ

枉語香逆言哉隱口乃泊瀬山爾廬爲云

哉を古義にヤとよみたれどなほ舊訓の如くカとよむべし○二三の間に妹ハといふことを加へて聞くべし略解にいへる如く泊瀬山に葬られたるをイホリセリといひなせるなり卷三石田王卒之時丹生王作歌(五〇六頁)にも

さにづらふわがおほきみはこもりくのはつせの山にかむさびていつきいますと玉づさの人ぞいひつるおよづれかわがききつるたはごとかわがききつるもとあり○枉は狂を誤れるなり

秋山のもみぢ何^{アハレト}怜^{レド}うらぶれて入りにし妹はまでど來まさず

秋山黄葉何^{アハレト}怜^{レド}浦觸而入西妹者待不來

何怜を舊訓にアハレトとよめるを略解古義にアハレミに改めたりなほアハレトとよむべし來マサズはイデ來マサズなりこれも山に葬りたるをいへるなり○卷二(二九七頁)に人麻呂のよめる

秋山のもみぢをしげみまどひぬる妹をもとめむ山路しらすも
といへる歌あり

世のなかはまこと二代は不^{ユカ}往^ザ有^ラ之^レすぎにし妹に不^{アハ}相^ス念^{オモ}者^{ヘバ}

世間者信二代者不往有之過妹爾不相念者

第三句を古義にユカザリシと改め訓みたれどユカヌサウナ(否、來ヌサウナ)といふべき處なれば舊訓の如くユカザラシとよむべし○スギニシはウセニシなり。結句はアハヌオモヘバ(舊訓)ともアハナクモヘバ(古義)ともよむべし○上三句の意は世中ハゲニ二度來ラズト見ユとなり。ユクはクルといはむにおなじ。卷四七九一頁にも

うつせみの代やもふたゆくになにすとか妹にあはずてわがひとりねむとあり

さきはひのいかなる人か黒髪の白くなるまで妹がこゑをきく

福何有人香黒髪之白成左右妹之音乎聞

はやく妻を失ひしを嘆く餘に老いぬるまで妻にたぐへる人を羨めるなり

吾背子をいづくゆかめと(さき竹)そがひにねしく今しくやしも

吾背子乎何處行目跡辟竹之背向爾宿之久今思悔裳

イヅクユカムトといふべきムを調の爲に轉じてメといへるなり。アラムヤをアラメヤといふ類なり○ネシクは寝夕事ガといふ意なり。卷四(八〇一頁)にオモヘリシクとあり。又上(一二七三頁)に玉ヒロヒシクとあり。いにしへ行はれし一つの格なり

○略解の譯を補ひて

夫はいづくへも行かざらむものと思ひきはめて打恨むる事などありしをり後向に寝しことありしがうせにし後の今になりて悔しや

と譯すべし

(にはつ鳥)かけのたり尾の亂尾の長き心もおもほえぬかも

庭津鳥可鷄乃垂尾乃亂尾乃長心毛不所念鴨

上三句は序にてニハツドリは枕辭なり。カケは雞の本名なり。家雞の字音にあらず。鳴聲より出でたる名なり。古事記八千矛神の御歌にもサヌツドリ、キギシハトヨム、ニハツドリ、カケハナクとあり○亂尾はミダレヲとよむべし(古義にはミダリヲとよめり)○四五は略解に

ナガキ心とはのどかなる心をいふ。妹が死しよりのどかなる心もなしといふ也

といへる如し。ユツタリトシタ心モ持タレヌとなり。今の辭に心ヲ持ツといふをい
にしへは心ヲ思フといひしなり

こもまくらあひまきし兒もあらばこそ夜のふくらくもわがをしみせ
め

薦枕相卷之兒毛在者社夜乃深良久毛吾惜責

古義に『コモマクラはマキの枕詞なり』といへるは非なり。コモ枕ヲ相マクとつづけ
るなり。マクは枕とする事。アヒマキシ兒モは共ニ枕トシテ寢シ女モとなり。四五
は夜ノ更クルコトモワガ惜マメとなり。畢竟妻ノウセニシ今ハ何ノ樂モナケレバ
夜ノ更クル事モ惜マジとなり

(玉づさの)妹は珠かもあしひきの(清き山邊にまけばちりぬる

玉梓能妹者珠氈足氷木乃清山邊蒔散染

略解に

宣長云。マケバは上の朝蒔シと同じくして火葬して其灰をまき散す事也。清キ山ベ

といへるも此故なり云々

といへり。所謂散骨なり。○染は漆の誤

或本歌曰

(玉づさの)妹は花かもあしひきの(この山かげにまけばうせぬる

玉梓之妹者花可毛足日本乃此山影爾麻氣者失留

羈旅歌

名兒の海を朝こぎくればわたなかにかこそ鳴^{ウラ}なるあはれそのかこ
名兒乃海乎朝榜來者海中爾鹿子曾鳴成何怜其水手

カコは舟子なり。鳴は略解に喚の誤とし古義に呼の誤とせり

(大正七年十一月二十二日脱稿)

附録

連體格の代に終止格をつかひたる

本集に往ユキカクル隱島乃埼々、秋山爾モミヅ反木葉乃、等里豆久麻豆爾、和可流乎美禮婆など連體格にユキカクルル島ノサキザギ、モミヅルコノハノ、クルマデニ、ワカルルヲミレバといふべきを終止格にいへる又は云へりと認むべき例あり。此等は果して悉く語格學者のいへる如く二段の傍四段にはたらきしなりと定むべきか
げに今二段活なる(又は當時既に二段活につかへる)語を四段活につかへる例あり。其例左の如し

隱

こぎたむる、浦のことごと、往ユキカクル隱島の埼々(卷六過辛荷島時作歌)

隱は連體格にてはカクルルなればユキカクルルとあるべきなれどこゝはユキカクルとよまざるべからず。但卷十四にウマグタノネロニ可久里爲、卷十五にヤソシマ我久里またクモキ可久里奴とあり又古事記沼河ヌナカハ日賣ヒメの歌にアヲヤマニ、ヒガ迦久良婆とあれば隱は四段にもはたらきしなり

懸

馬にこそ、ふもだし可久物、牛にこそ、鼻繩はくれ(卷十六乞食者詠)
フモダシカクルモノといふべきをカクモノといへると卷二(明日香皇女殯宮時作歌)
に御名ニ懸世流アスカ河云々といへるとを思へば懸は四段にもはたらきしなり(四
段活ならではカカスとならず、従ひてカカセルとは活かす)

黄變

秋山に黄反木葉乃うつりなば更にや秋を見まくほりせむ(卷八)
わがやどに黄變蝦手みるごとに妹をかけつつこひぬ日はなし(卷八)
わがせこがしろたへ衣ゆきふればにほひぬべくも黄變山可聞(卷十)
足引の山さなかつら黄變及妹にあはずやわがこひをらむ(卷十)
こもちやまわかかへるでの毛美都麻氏ねもとわはもふなはあどかもふ(卷十四)
これらもモミヅルコノハノ、モミヅルカヘルデ、モミヅル山カモ、モミヅルマデといふ
べきなれど卷十九に毛美知多里家利、毛美知阿倍牟可聞とあり又卷八に
わがやどのはぎの下葉は秋風もいまだふかねばかくぞ毛美照

とあれば黄變は四段にもはたらきしなり

忘

玉はこの道にいでたち別れこし日よりおもふに忘時無(卷十二)
これもワスルルトキナシとはよまれず。さて忘を四段につかひたる例は卷二十に
和須良武砥ぬゆきやまゆきわれくれどわがちちははは和須例せぬかも
又日本紀彦火々出見尊の御歌にイモハ和素邏珥とあれば今も四段活と認めてワス
ルトキナシとよむべし(卷二十の歌の結句は二段活なる、注目すべし)
右の外觸、留、馳などもイソニ布理、等々尾カネ、コマヲ波佐世氏(又イハバシを石走と書
けり)などつかひたれど此論に要なければしくは述べず
かく今二段活なる(又は當時既に二段活につかへる)語を四段につかへる例あれば

取與、物しなければ(卷二)

取委、物しなければ(同)

ころもでの別今夜從(卷四)

黒馬來夜者(同)

黒馬之來夜者(卷十三)

田立羸きみはかなしも(卷七)

にひむろを蹈靜子之(卷十一)

まつら舟亂穿江之(卷十二)

これらもトリアタフ、トリマカス、ワカルコヨヒユ、クロマノクヨハ、田ニタチツカル、フミシヅム子ノ、ミダルホリ江ノとよみて四段活につかへるなりとせむか。又は各句の言數を超えてアタフル、マカスル、ワカルル、クル、ツカルル、シヅムル、ミダルルとよむべきか。集中に假字書にせる例に

耆^{オヒナ}矣^ナ奴^ヌわが身ひとつに(卷十六)

伊波流毛能から(卷十四)

いはず伎奴可母卷二十

こよて伎怒加牟(同)

安良波路万代も(卷十四)

かひり久麻豆に(卷二十)

とりて久麻豆に(同)

かへり久麻低に(同)

ゆきて久麻豆と(同)

和可流乎みれば(同)

なきしぞ母波由(同)

おきてぞ伎怒也(同)

などある(初一首の外は皆東歌又は防人の歌なり)を見ればなほ言數のまゝにトリアタフ、トリマカス、ワカルコヨヒユ、クロマノク夜ハ、田ニタチツカル、フミシヅム子ノ、ミダルホリ江ノとよむべきなり。然もかの隱懸、黄變、忘などの如く四段にも活ききといふ證なければ率爾に四段活につかへるなりとは認むべからず返りて思ふに集中にカモをもて形容詞を受けたるに

極^{コソ}此^シ疑^{カモ}(卷三)

許^コ其^シ之^シ可^カ毛^モ(卷十七)

久夜斯可母(卷五)

事乏可母(卷八)

多頭多頭思鴨(卷十二)

といへる例あり。これらは連體格にコゴシキカモ、クヤシキカモ、トモシキカモ、タヅタ
ヅシキカモといふべきを終止格にいへるなり。之を思へばいにしへ、連體格を用ふべ
き場合に終止格をつかふ事ありしなり。

卷六過辛荷島時作歌に

許伎多武流、浦のことごと

といふ句あり。余は新考(一〇五二頁)に

コギタムルはコギメグルなり。但オキツ島コギタム舟ハ、武庫ノ浦ヲコギタム小舟
などいへる例によればこゝもコギタム浦ノコトゴトとありて然るべきなり

といひき。然るに右の「いにしへ連體格を用ふべき場合に終止格をつかふ事ありしな
り」といふ發明によりてコギタムルとコギタムとの關係をも明にすることを得き。即
オキツ島コギ回舟(卷三)ムコノ浦ヲコギ轉小舟(同)はコギタムル舟ハ、コギタムル小
舟といふべきを連體格の代に終止格をつかひてコギタムといへるなり。さて卷一に

コギ多味ユキシ棚ナシ小舟とあるを思へば回(タム)は上二段にはたらく語なり。但卷三(四
八五頁)にミヌメノ埼ヲコギ廻者とあるをタメバとよまば四段にもはたらししもの
とすべし

タムルとタムとの關係にひとしきはククルとククとの關係なり。即卷八に

足引の許乃間立八十一ほととぎすかくききそめて後こひむかも

又卷十七に

はるの野のしげみとび久久うぐひすの云々

とあるは卷四に枕ユ久久流ナミダニゾとあると同語にてタチククルホトトギス、ト
ビククルウグヒスといふべきを連體格の代に終止格を用ひてタチクク、トビククと
いへるなり。先哲がククルとククとを別語とせるは誤れり。さて古事記に自手(タチ)侯(タケ)漏(タケ)出(タケ)
久岐(タケ) 又また自我手(タチ)侯(タケ)久岐(タケ)斯(タケ)子(タケ)也とあるを見ればククルも亦上二段にはたらく語な
り(大正七年九月三日稿)

更に進みて臆説を述べむに連體格の代に終止格をつかひたる例は枕辭には頗多し。
たとへば釧著(クシ)クル手節(タテ)といふべきをクシロツクタブシノ崎(サキ)ニといひ、搔數(カキ)フル(ツク)二と

いふべきを可伎加蘇布フタガミヤマニといひ眞玉著クル緒といふべきをマタマツクヲチコチカネテなどいひ百ニ足ラヌ八十といふべきをモモタラズ八十ノチマタニなどいひ名グハシキ狹岑ノ島といふべきを名細之サミネノ島ノといひ花グハシキ櫻といふべきを波那具波辭サクラノメデといへりこの名グハシ狹岑ノ島花グハシ櫻はかのナガナガシ夜カナシ妹オナジ人などと同視すべからず此等の語の如く一語となれるにあらねばなり冠辭考などに就いて點檢せば此類なほ多く出來べし。又右の例の東歌及防人の歌に多きは既に本論にいへる如しかく連體格の代に終止格をつかへる例の特に枕辭并に邊土の歌即太古の遺風を見つべきものに多きを思へば太古には語法も後世の如く精細ならざりしを時遷りてやうやう連體格をつかふべき場合の定まりしにはあらざるか又案するにいにしへ終止格を受けし辭の世下りて連體格を受くるやうになりしものあり見ユガニなど然り此問題につきては學者の研究すべき事多かるべし我も研究せむ人も研究せよ(十月十二日追記)

萬葉集新考 卷八

井上通泰 著

春雜譚

志貴皇子權御歌一首

(いはばしる)たるみの上のさわらびのもえいづる春になりけるかも
石激垂見之上乃左和良妣乃毛要出春爾成來鴨

三註共にタルミを地名としたれどタルミは卷七(二六八頁)にいへる如く瀧の事なりタルミノウへは瀧の上の山なり○蕨のもえいづるに托して御運の開けし喜をうたひ給へるなり

鏡王女歌

かむなびのいはせの杜のよぶ子鳥いたくななきそわがこひまさる

神奈備乃伊波瀬乃杜之喚子鳥痛莫鳴吾戀益

鏡王女の事は卷四六一九頁にいへり。ヨブコ鳥はカンコ鳥なり。○カムナビノイハセノモリは古義に『大和國平群郡にあり』といひ龍田考(四二丁)に

磐瀬、杜は今の龍田川(○鹽田川)の川下、眞の神南備の三室の山本にかゝるところ川の東傍に松の老木ども村立残れる森を今も土人の普く岩瀬、杜といふなることれ則古歌の趣にもよくかなひたり

といへり。○四五の間に汝ガ聲ヲキケバといふことを省きたるなり

駿河采女歌一首

沫雪かはだれにふると見るまでにながらへちるはなにの花ぞも

沫雪香薄太禮爾零登見左右二流倍散波何物花其毛

ハダレについて契沖は

ハダレはマダラなり。第十と第十九には雪をハダレとのみもよめり。又第十にハダレ霜フリともよめれば雪に限る言にもあらず

といひ雅澄は

雪のはなればなれに散て降よしなり

又(古義卷四の八八丁)

集中雪の歌にホドロともハダレとも通はしよめる。ダとナと又殊に親く通へば

ホドロ、ハダレ、ハナレは皆全同言なり

といひ久老の信濃漫録(六丁)には

ハダはハナと通言にして、そのハナ、ハダは初をいふ言にて、雪の次第にふり積るべき始にふれる雪をハダレ雪、霜の次第にふり覆ふべき始に置わしたるをハダレ霜とはいふなるべし。下のレはすべてふるものにつけていふ言葉なり。今も北國の方言に雪のはじめてふりつもれるをハダレ雪といへりといひ守部の鐘の響(六八丁)には

雪はもはら沫のむらがれたるさまにしていともやはらかにほららぎやすき物なれば其形に就てハダレ雪とはいひつづけけるが體語となりつるからただハダレとのみもいひし也。ハハラと同言なり。故雪のみならず霜にも

よめり

といへり。案ずるにハダレはマダラとおなじくて梵語マシダラの音義共に轉せるならむ。而して雪といはでただハダレとのみもいふはなほサミダレノ雨、サザレ石を略してサミダレ、サザレといふが如くなるべし。○ナガラフルはまたナガルルといふ。空より物の降ることなり(卷五八八九頁参照)

尾張連歌二首 名闕

春山の開乃乎爲黑爾春菜つむ妹がしら紐みらくしよしも
春山之開乃乎爲黑爾春菜採妹之白紐見九四與四門

第二句について略解に

翁(○眞淵)の云。乎爲黒は乎鳥里の誤也。卷六ハルベニハ花咲乎遠里といふに同じ。といはれき。されど此歌にてはヲヲリは叶へりともきこえず。宣長云手鳥里の誤にて開は崎の借字なるべしといへり。、、サキノタヲリは山の崎のたわみたる所をいへれば宣長説に従ふべき也

といへり。眞淵の説に従ふべし。春山ノ花ノサキヲレルニといふ意なり。花といふ

べきを略せるは三和山ハイマダフフメリ、三笠ノ山ハサキニケルカモなどと同例なり。さて黒を里の誤とするについては反對せる人なけれど爲を鳥の誤とするについては木村博士は異論を唱へたり。即博士は集中よりヲとよむべき處に爲の字を書ける五例を擧げて

かくいくらもある爲を皆鳥の誤とはいひがたし。按にこは爲にヲの音ありてやがて其音を用ゐたるなるべし。、、爲をヲとよぶは意字愛字にオ、以字にヨの音あるたぐひ也云々

といへり(字音辨證上卷八頁)○春菜は字のまゝにハルナとよむべし(舊訓及略解にはワカナとよめり)○ミラクシヨシモは近くは卷七(一三四一頁)にイモセノ山ヲミラクシヨシモとあり。見ルニ興アリといふ意なり

(うちなびく)春きたるらし山のまの遠きこぬれの開往みれば

打靡春來良之山際遠木末乃開往見者

結句は舊訓にサキユクミレバとよめるを略解にサキヌルミレバに改めたり。卷十八に

ふちなみの佐伎由久みればほととぎすなくべきときにかづきにけり
とあればなほサキユクとよむべし○トホキコヌレは俗語にていはば木ノテッペ
ンなり。卷十に

うちなびく春さりくらし山のまのとはきこぬれのさき往みれば
とありてそのトホキコヌレは最木末と書けり。古義に『花の木つぎつぎにさきゆ
くを見れば云々』といへるは誤解せるなり。一樹についていへるなり

中納言阿倍廣庭卿歌一首

こぞの春いこじてうゑしわがやどの若樹の梅は花さきにけり
去年春伊許自而植之吾屋外之若樹梅者花咲爾家里

イコジテは契沖が

イは發語の詞○余のいふ添辭コジテは掘テなり
といへる如し

山部宿禰赤人歌四首

春の野にすみれつみにとこし吾ぞ野をなつかしみ一夜ねにける
春野爾須美禮採爾等來師吾曾野乎奈都可之美一夜宿二來

スマレは今いふスマレ即スマウトリ草なり。景樹はレンゲなりといへれどレンゲ
はおそらくは近き昔に外國より渡りしものならむ○略解に『葦つむは衣摺ん料な
るべし』といへる如し。野ヲナツカシミは野ガシタハシサニとなり

(あしひきの)山櫻花日ならべてかくさきたらば甚こひめやも
足比奇乃山櫻花日並而如是開有者甚戀目夜裳

日ナラベテはアマタ日ヲ重ネテなり。サキタラバはサキテアルナラバとなり○甚
を略解にイタモとよめり。イトをいにしへイタともいひしかどこ、はモとよむべ
き字なし。さればイトコヒメヤモ又はイタコヒメヤモとよむべし

わがせこに見せむともひし梅の花それとも見えず雪のふれれば
吾勢子爾令見常念之梅花其十方不所見雪乃零有者

ワガセコは友をいふと略解にいへる如し

あすよりは春菜^{ハルナ}つまむとしめし野にきのふもけふも雪はふりつつ
從明日者春菜將採跡^{アト}探之野爾昨日毛今日毛雪波布利管

草香山歌一首

(おしてる) 難波をすぎて (うちなびく) 草香の山を ゆふぐれに
わがこえくれば 山もせに さける馬^ア醉^セ木の 不^{ニクカラ}惡 君をいつしか
ゆきてはや見む

忍照難波乎過而打靡草香乃山乎暮晚爾吾越來者山毛世爾咲有馬醉木
乃不惡君乎何時往而早將見

右一首依作者^{ナリ}微^{ナリ}不^レ顯^ニ名字

草香山は即生駒山にて大和河内兩國に跨れり(卷六七頁〇八及一頁〇九 參照)〇山毛狹
ニは山一面ニとなりアセミは今もアセミ(又アセビ又アセボ)といひて白き花のむ
らがりて穂にさくものなり現に奈良などにはいと多く生ひたり(卷二〇二頁參照)〇

サケルアセミノはアセミゾサケルソノアセミノといふべきをつづめたるなり〇
不惡を古義にアシカラヌと改訓せるはわろしなほニクカラヌとよむべし(卷七一
四六一頁)にもウミノ玉藻ノ僧者^{ニクハ}アラヌヲとありニクカラヌといへばやや水くさ
く聞ゆれど實はカハユシといふにかはらぬなり〇ユキテはこゝにてはカヘリテ
なり

櫻花歌一首并短歌

をとめらが かざしのために みやびを之^ガ かづらのためと △
しきませる 國のはたてに さきにける 櫻の花の にほひはもあ
なに

憾孀等之頭挿乃多米爾遊士之纒之多米等敷座流國乃波多互爾開爾鷄
類櫻花能丹穗日波母安奈何

タメニとタメトとをむかはせたるに注意すべしニとトとはいにしへ通用せしな
りさてタメトは句を隔て、サキニケルにかかれるなり〇代匠記に

シキマセル此句の上には二句ばかり落たる歟、試に補て云はばヤスミシ
シワガオホキミノなるべし

といへり○ハタテは果なり古義に

國の中央はいふまでもなし極までもといふほどの心なるべし

といへり○ニホヒは色なり。アナニはメデタヤとなり。略解に

紀に妍哉をアナニエヤとよめる如くほめいへるなり

といへり○何は諸本に余とあり

反詔

こぞの春あへりし君にこひに手師さくらの花は迎來らしも

去年之春相有之君爾戀爾手師櫻花者迎來良之母

右二首若宮、年魚麻呂誦之

略解に

宣長は右の長歌は脱句有て春山を人の越行事の有しなるべし。さて此反歌に迎

とはよめる也。然らざれば迎といふことよしなしといへり。さも有べし

といひ古義に

戀爾手師は思ふに師は伎字を草體より誤れるものにてコヒニテキなるべし。迎

來良之母はムカヘケラシモと訓むべし。待迎へケルラシの謂なり

といへり。案ずるにコヒニテシとはいふべからざる辭なり(コヒニシ又コヒテシと

こそいふべけれ)。おそらくは戀爾手師は戀爾師乎の誤ならむ○次に結句について

云はむに卷一(七八頁)に馬ナメテ御獵タタシシ時ハ來向とあるにて思へば櫻ノ花

ノサク時ガムカヒ來ルサウナといへるなるべし。さらば迎はムカヒとよむべし。迎

は古書ニムカヒにも借れり○一首の意は

去年ノ春櫻ノモトニテ逢ヒシ君ニ我ハ戀ヒニシヲ今年又櫻ノサクベキ時ニナ

リヌ

といへるならむ

山部宿禰赤人歌一首

くだら野のはぎの古枝に春まつと居之うぐひすなきにけむかも

百濟野乃芽古枝爾待春跡居之鷺鳴爾鷄鷓鴨

百濟野は卷二二七六頁なる人麿の長歌に見えたるクダラノ原におなじ。今の北葛城郡のうちなり。○居之は略解の一訓の如くヲリシとよむべし。古義に來の字を補ひてキキシとよめるはわろし。一時とまりぬし意にあらざればなり。

大伴坂上郎女柳歌二首

わがせこが見らむ佐保ぢの青柳を手折りてだにもみむ綵もがも

吾背兒我見良牟佐保道乃青柳乎手折而谷裳見綵欲得

古義に「吾は太宰府にありて行て見る事もかなはざれば云々」と釋せる如し。略解に次の歌の處に「是は太宰府に在てよめるなるべし」といへるは非なり。二首共に太宰府にてよめるなり。○ワガセコといへるは親しき男なり。おそらくは一族中の人ならむ。郎女の本家は佐保にありしなり。卷六に大伴坂上郎女與姪家持從佐保還歸西宅歌あり又下にも佐保宅作とあり。郎女が太宰府にありしは夫の無かりし程なる事卷四(八〇九頁)にいへる如し。さればワガセコといへるは夫にあらず。○佐保は

奈良より佐保へ行く路なるべし(但佐保の路をもサホチといひつべし。卷五六三頁奈良遲を見よ)○第四句は正しくはヲラセテダニモ、タヲラセテダニなどいふべし。手折而は令折而の誤にてもあるべし。結句の綵は契沖のいへる如く縁の誤なり。

(打上)佐保の河原のあをやぎは今は春べとなりカチノボルに雞類鴨ケムカモ

打上佐保能河原之青柳者今者春部登成爾鷄類鴨

打上は舊訓にウチアグルとよめるを契沖眞淵はウチノボルに改めたり。雅澄は

ウチアグルと訓べし。、、又はウチノボルとも訓べきにや

といへり。ウチノボルとよみて准枕辭とすべし。○結句はナリニケムカモとあらではかなはず。されば類は誤字なり。

大伴宿禰三林梅歌一首

霜雪もいまだすぎねばおもはぬにかすがの里に梅の花みつ

霜雪毛未過者不思爾春日里爾梅花見都

略解に三林は三依の誤歟といへり。○スギネバは過ギヌニなり。ネバは古く、ヌニは

新しくて當時は並び行はれしなり。たとへば卷二なる人麿の長歌(二七六頁)に
嘆も、いまだすぎぬに、おもひも、いまだつきねば云々
とあり。さてそのスギヌニは降止マヌニとなり

厚見王歌一首

かはづなくかむなび河にかげみえて今哉さくらむ山ぶきの花
河津鳴甘南備河爾陰所見今哉開良武山振乃花

他處に居て想像せるなり。甘南備河にてよめるにあらず。この歌のカムナビ河はい
づくにか知りがたし。六人部是香は龍田川の事とせり。龍田考三七丁。○カハヅナク
は准枕辭なり。○今哉は諸本に今香とあり

大伴宿禰村上梅歌二首

ふふめりといひし梅がえけさふりし沫雪にあひてさきぬらむかも
含有常言之梅我枝今旦零四沫雪二相而將開可聞

古人は雪がふれば梅花が促されてさくやうに思ひしならむ。下にも沫雪ニフラエ

テサケル梅ノハナ云々といふ歌あり

(かすみ立)かすがの里の梅の花山下風にちりこすなゆめ

霞立春日之里梅花山下風爾落許須莫湯目

初句はカスミタツとよむべし(略解にはカスミタチとよめり)枕辭なり。今霞がたて
りとはあらず。○山下風を略解古義共にアラシノカゼとよみたれど(和名抄に孫
柄云、嵐山下出風也、和名阿良之とあるによれるなり)卷一(一一五頁)に
みよし野の山下風のさむけくにはたやこよひもわがひとりねむ

卷十に

あしひきの山下風はふかねども君なきよひはかねてさむしも
とあるを共にヤマノアラシとよみてこゝのみアラシノカゼとよむべきにあらず。
否山下風と書きて或はヤマノアラシとよませ或はアラシノカゼと訓ますべきに
あらず。さればこゝもヤマノアラシとよむべし。さてその山は即春日山なり。○チリ
コスナは散ツテクレルナとなり

大伴宿禰駿河麻呂歌一首

かすみ立^{タツ}かすがの里のうめの花はなにとはむとわがもはななくに
霞立春日里之梅花波奈爾將問常吾念奈久爾

上三句前の歌とひとしければ打見には和歌かともおぼゆれど歌の意を案ずるに
さにはあらず。ただ上三句の相ひとしきによりて並べ擧げたるならむ(さらずは相
聞の部に收むべきなり)○上三句は序なり○ハナニを契沖以下アダニの意とせり。
即契沖は

あだなる意にて人を問はむとは思はずとなり
といひ宣長は

花ニトフとははなばなくあだにとふ意也。卷廿マヒシツツキミガオホセルナ
デシコガハナノミトハムキミナラナクニといふと同じ
といひ雅澄は

ハナニトハムトはアダニ問ハムトと云が如し。ハナは集中にシラガツク木綿ハ
花物また人ハハナ物ヅなどよめる花物もはなばなくあだなる物をいへり。こ
こもそのハナなり。廿卷にマヒシツツ、とあるも同じ

といへり。案ずるにハナニは副詞にてげにアダニといふにおなじ(卷二十なるハナ
ノミはハナノミヲなり)はやく卷七(一四二八頁)に

いきのをにおもへる吾を山ちさのはなにか君がうつろひぬらむ
とあり、下にも

風まじり雪はふるとも實に不成^{ナラズ}わぎへの梅をはなにちらすな
とあり○一首の意はアダアダシキ心ニテ妻ドヒセムトハワガ思ハヌコトヨとい
へるなり

中臣朝臣武良自^{ムラヨシ}歌一首

時は今は春になりぬとみ雪ふる遠山^{トホヤマ}邊^{ノヘ}爾^ニかすみたなびく
時者今者春爾成跡三雪零遠山邊爾霞多奈婢久

第四句を舊訓と古義とにはトホキヤマベニとよみ略解にはトホヤマノヘニとよ
めり。略解に従ふべし。山邊を遠しといへるにあらねばなり。但爾はおそらくは毛な
どの誤なるべし

河邊朝臣東人歌一首

春雨のしくしくふるに高圓の山の櫻は何如有良武
春雨乃敷布零爾高圓山能櫻者何如有良武

シクシクニは類ニなり。結句は舊訓三註共にイカニアルラムとよみたれど卷四(八)〇〇頁なる何如將爲人目シゲクテ、卷七(一四)〇九頁なるオモフココロヲ何如裳勢武の如くカに當る字なくともイカニカとよむべし。〇略解に「花の長雨にうつろはん事をおもふ也」といへるよりは古義に「此頃いかにあるらむ、今はさき出ぬらむ云々」と釋せる方に心引かる

大伴宿禰家持鷺歌一首

うちきらし雪はふりつつしかすがにわぎへの苑にうぐひすなくも
打霧之雪者零乍然爲我二吾宅乃苑爾鷺鳴裳

ウチキラシは後のカキクラシにおなじ。シカスガニは然雪ハ降レドとなり(一四六)一頁参照

大藏少輔丹比屋主真人歌一首

難波べに人のゆければおくれてる春菜つむ兒をみるがかなしさ
難波邊爾人之行禮波後居而春菜採兒乎見之悲也

兒は若き女、人はその女の夫なり。ユケレバはユケルニ、オクレキテは跡ニ残リテなり。〇カナシサを悲也と書けるは卷七(一二四)二頁にサヤケサを清也と書けると同例なり

丹比真人乙麻呂歌一首

かすみたつ野のへの方にゆきしかばうぐひすなきつ春になるらし
霞立野上乃方爾行之可波鷺鳴都春爾成良思

ヌノへは即野邊なり。〇ユキシカバは後世のユキシニなり。卷三(三九)〇頁なるやきつべにわがゆきしかば駿河なるあべの市路にあひしこらはも

卷七(一三三七)頁なる

たまくしげみもろと山をゆきしかばおもしろくしていにしへおもほゆ

のユキシカバにおなじ

高田女王歌一首

やまぶきの咲有野邊乃つぼすみれこの春の雨にさかりなりけり

山振之咲有野邊乃都保須美禮此春之雨爾盛奈里鷄利

第二句は舊訓三註ともにサキタルヌベノとよめれどサケルヌノへノともよむべし。さてヤマブキノサケルは野ノへの裝飾にいへるのみ○ツボスミレは一種の名にあらずすみれの花を形容してツボスミレともいひしなり。ツボの義は未明ならず。契沖の説にすみれの花は下の方に圓くて壺の如くなる處あればツボスミレとはいふなりと云へり

大伴坂上郎女歌一首

風まじり雪はふるとも實に不成わぎへの梅をはなにちらすな

風交雪者雖零實爾不成吾宅之梅乎花爾令落莫

卷五(九六六頁)貧窮問答歌に

風まじり雨ふる夜の雨まじり雪ふる夜は云々

とあり○ハナニは上(一四九八頁)にいへる如くアダニなり。即イタヅラニなり。古義に花ノミニテと譯せるは非なり○第三句の不成を舊訓三註共に字のまゝにナラヌとよめれどさては意通せず。不を將の誤としてミニナラムとよむべし

大伴宿禰家持養鵲歌一首

春の野にあさるきぎしの妻戀におのがあたりを人にしれつつ

春野爾安佐留鵲乃妻戀爾己我當乎人爾令知管

養雉は諸本に春雉とあるをもて正すべし○第三句は妻ヲ戀ヒテナク聲ニの意なり○人ニシレツツのシレはシラレの約かと思ふに本に人爾令知管とかけり。シラレならば所知とあるべきなり。代匠記に

令知をシレとよむ事不審なり。シレはシラレなれば所知とぞ書ぬべき。但第十三の長歌の中にも人不令知○人不令知モトナヤコヒムイキノヲニシテと書るをヒトシレズと點せり。知らしむる故に知らるゝ意にかくも書にや
といひ略解に

シレツツはシラシメツツをつづめいふ也
といへり。シラセツツの約とすべきか

大伴坂上郎女歌一首

よのつねにきくはくるしきよぶ子鳥こゑなつかしき時にはなりぬ
尋常聞者苦寸喚子鳥音奈都炊時庭成奴

右一首天平四年三月一日佐保宅作

契沖が

ヨノツネとは春ならぬ他時なり。此歌喚子鳥のいつも鳴く證なり

といへる如し○さてクルシキを釋して代匠記に

キクハクルシキはキキグルシキにてキキニクキなり。見にくきを見苦シと云が
如し

といひ古義に

キクハクルシキはキカマウキといふ意なり。俗にキキトモナイと云に同じ

といへるは非なり。クルシキは後世のワビシキなり。クルシクモフリクル雨カなど
皆然り。ここにてはナツカシキのうらなり

春相聞

大伴宿禰家持贈坂上家之大嬢歌一首

わがやどにまきしなでしこいつしかもはなに^{サキ}咲奈武^{ナム}なぞへつつみむ
吾屋外爾蒔之瞿麥何時毛花爾咲奈武名蘇經乍見武

第四句の咲奈武を舊訓にサカナムとよめるを契沖は難じて

六帖にもサカナムとあれどサカナムは願ふ詞なればイツカと云にかけあひが
たき歟。サキナムと點じ換べきにや

といひ古義に之を敷衍して

すべて希ふ意のナムの上のかゝりはゾヤ何等の辭をおくこといにしへに例な
きことなり。十七にホトトギスキナカムツキニイツシカモハヤク奈里ナムと云

るをも思合すべし。しかるを後撰集にイツシカサクラハヤモサカナム、拾遺集にイツシカモツクマノマツリトクセナムなど上にイツシカといひて希ふ意のナムにて受けたるはいにしへにたがへり

といへり。案ずるに咲奈武は契沖雅澄の説の如くサキナムとよむべく、さてイツシカモ花ニサキナムはハヤ咲ケカシと譯すべし。イツ鳴カウカと疑ふ時もハヤ鳴ケカシと願ふ時も共にイツカ來ナカムといふを思ふべし。願ふ意の時といへどもイツカ來ナカナムとは云はず、疑ふ意の時も願ふ意の時も承くる辭はかはらぬなり。後撰拾遺なるはイツシカをハヤモ、トクを強むる辭のやうにつかへるなり。萬葉時代には例なき事なれどこれも一種の語法と認むべし。○ハナニは花トなり。ナゾへはヨソへなり。四五の間にサキナバ妹ニといふことを補ひて聞くべし

大伴田村家之大嬢與妹坂上大嬢歌一首

つばなぬく浅茅が原のつぼすみれ今盛なりわがこふらくは

茅花拔浅茅之原乃都保須美禮今盛有吾戀苦波

上三句はイマサカリナリの序、ツバナヌクは浅茅が原の准枕辭なり。カハヅナクカ

ムナビ川のカハヅナクにおなじ。コフラクは戀フル事ハとなり

大伴宿禰△△△坂上郎女歌一首

こころぐきものにぞありける春がすみたなびく時に戀のしげきは

情具伎物爾曾有鶏類春霞多奈引時爾戀乃繁者

題辭の宿禰の下に家持贈の三字をおとせるなる事略解にいへる如し。○ココログキははやく卷四に二處(七九二頁及八三一頁)見えたり。ジレットタイ、シンキナなどいふ意とおぼゆ

笠女郎贈大伴家持歌一首

水鳥の鴨の羽色の春山のおぼつかなくもおもほゆるかも

水鳥之鴨乃羽色乃春山乃於保束無毛所念可聞

上三句は序、又其中にて初二は春山の形容なり。さて春山をオボツカナシの序としたるは春山は霞かゝりてさやかならぬ物なればなり。オボツカナシは心の晴れやらぬなり

紀女郎歌一首

やみならばうべも來まさじ梅の花さけるつく夜にいでまさじとや
闇夜有者字倍毛不來座梅花開月夜爾伊而麻左自常屋

第二句は來マサザラムモ道理ナリと云へるなり。イデマサジトヤは來マサジトヤ
なり。上に來マサジといひたれば辭を換へたるのみ。○而は誤字か。但下にもミセム
麻而爾波、アフトキ麻而波とあり

天平五年癸酉春閏三月笠朝臣金村贈入唐使歌一首并短歌

(玉だすき) かけぬ時なく いきのをに わがもふきみは (うつ蟬の)
△ みことかしこみ 夕されば たづがつまよぶ 難波がた 三津
の埼より 大舶に まかぢしじぬき 白浪の たかき荒海を 島づ
たひ いわかれゆかば とどまれる 吾はぬさ引 いはひつつ き
みをば將往 はやかへりませ
玉手次不懸時無氣緒爾吾念公者虚蟬之命恐夕去者鶴之妻喚難波方三

津崎従大舶爾二楫繁貫白浪乃高荒海乎島傳伊別往者留有吾者幣引齊
乍公乎者將往早還萬世

題辭の閏はウルヒとよむべし。貫之集にウルヒサヘアリテユクベキ年ダニモ云々
とあり。後の書にウルフ月と書ける

古今集春下サクラ花春クハハレルといふ歌の詞書の閏月は古寫本に漢字にて
閏月と書けりや假字にてウルフ月と書けりや知らまほし

もしウルヒ月の音便ならばウルウ月と書くべきなり。否こは閏フ月とウルフを動
詞のまゝにて用ひたりとも見らるべけれどただ閏といはむは必ウルウと書か
は正しからざるに似たり。然らばウルフと書けるは信友等のいへる如く誤なりや
といふに輕々しく然りとはいふべからず。かのカギロヒをカゲロフと書きスマヒ
をスマフと書きムカヒをムカフと書く類あるを見ればウルヒテをウルウテ、カゲ
ロヒテをカゲロウテ、スマヒテをスマウテ、ムカヒテをムカウテと書く類とは別に
てヒの音をフに轉じても唱へしなるべし。さればウルヒと書くが正しきはいふ迄
も無けれど、ウルフと書けるをひたぶるに誤として斥くべからず

カケヌ時ナクは心に懸ケヌ時ナクなり。イキノヲニは近くは卷七(一四二八頁)にもイキノヲニオモヘル吾ヲ云々とあり。大事ニといふことと思はる。○契沖の説にウツセミノの下に世ノ人ナレバオホキミノの二句を落せりといへり。之に従ふべし。○イワカレのイは添辭なり。○幣引の引は略解に「取の字の誤なるべし」といへり。イハヒツツは神ヲ祭リツツなり。○將往は將待の誤ならむと契沖いへり。追考 所藏の鎌倉時代の書寫とおぼゆる古今集にはウルフ月と書けり

反歌

波の上ゆみゆる兒島の雲隱クモモリあないきづかし相別去者アヒワカレナバ

波上從所見兒島之雲隱穴氣衝之相別去者

兒島は代匠記略解に備前の兒島なりといへれど兒島と書けるは借字にて實は小島なり。而して其小島は古義に「何地にある島とも定めがたし」といへる如し。○雲隱は從來クモガクリとよめれど小島の方よりいへる辭なれば(下にいふべし)クモゴモリとよまではかなはず。さてそのクモゴモリは雲ニコモリテといふことなるをちぢめて一語とし又テを略せるなり。○イキヅカシはおのづから息づきせらるゝ

にてナゲカハシといはむにひとし。○相別去者を舊訓にアヒワカレナバとよめるを略解に

アヒワカレナバとよめばイキヅカシカラムといはではかなはず

といひてアヒワカレイネバとよみ古義には又アヒワカレナバとよめり。案ずるにアヒワカレナバとよむべからざる事勿論なれどアヒワカレイネバともよむべからず。イヌは變格にてイヌレバといひてイネバといはざればなり。さてこゝはアヒワカレユケバとよむべし。長歌にもイワカレ往者とあり。義門の活語雜話三編の説は非なり。○卷七(一四四七頁)にミゴモリニイキヅキアマリ云々とあり。卷十四に

あぢのすむ須沙のいり江のこもりぬのあないきづかしみず久にして

とあるに合せて思へば上三句はアナイキヅカシの序なり。されば一首の意はただ相別レユケバアナイキヅカシといへるなり。さて何故に波ノ上ユミユル兒島の雲ゴモリをアナイキヅカシの序とせるかといふに雲にこもれば息がつまるによりてなり

(たまきはる)命にむかひこひむゆはきみがみ船の梶柄カキにもが

玉切命向戀從者公之三舶乃梶柄母我
卷四(七六二頁)に

ただにあひて見てばのみこそたまきはる命にむかふわが戀やまめ
とあり。イノチニムカヒは命ニ匹敵スル程ニといふ意なり。コヒムユハは戀ヒムヨ
リハなり。○梶柄は舊訓にカヂカラとよめり。契沖は「太刀の柄、鎌柄の例を思へばカ
ヂツカともよむべきか」といひ雅澄は「弓束といふ例によらばカヂツカともいふべ
きものなり」といへり。いづれともよむべし。寧君ガ御船ノ梶ノ柄トナリテ君ニタダ
ヒ行カマシといへるなり

藤原朝臣廣嗣櫻花贈娘子歌一首

此花の一よの内に百種の言ぞこもれるおほろかにすな
此花乃一與能内爾百種乃言曾隱有於保呂可爾爲莫

契沖は「一與とは今按葩を云歟」といひ千蔭は「一ヨは一瓣の事をかくいふなるべし」といへり。○三四はモモクサノ言ヲゴメタルと直して心得べし。即御身ニ語ラマ
ホシキサマザマノ言ヲ込メオキタリとなり。オホロカニスナは粗末ニスナ、大切ニ

セヨとなり

娘子和歌一首

此花の一よのうち波ももくさの言もちかねて所折けらずや
此花乃一與能裏波百種乃言持不勝而所折家良受也

波は爾などの誤なるべし。○所折を従来ヲラレとよめれどヲレニとよむべし。ケラ
ズヤはケリを強くいへるなり。卷五(八九四頁)にもアヲヤギハカヅラニスベクナリ
ニケラズヤとあり。思ふに廣嗣より贈れる櫻花の娘子の手に入りし時折れたる莖
のまじりたりしにてそれを巧に利用したるなり。○初句は此花ハソノとうつすべ
し。言持のモチはタモチなり。卷二(一六二頁)に

みよし野の山松がえははしきかも君が御言をもちてかよはく
とあり。草木を折りてそれに言を托けて人に贈るといふ思想今の歌とおなじ

厚見王贈久米女郎歌一首

屋外在さくらの花は今もかも松風疾地に落らむ

屋戸在櫻花者今毛香聞松風疾地爾落良武

初句はヤドナルと四言によむべし。古義には舊訓に従ひてヤドニアルとよめり。略解にも在の上に爾を脱せるかといへり。げにナルはニアルの約なれどニをあらはしてヤドニアルとよみてはニの言耳に立ちてかへりてよからず。もし強ひて五言とせむとならばヤドナルヤとこそ云ふべけれ。さてヤドは久米女郎の家なり。○第四句の疾を舊訓にハヤミとよめるを古義にイタミに改めたり。卷十五に風波夜美オキツミウラニヤドリスルカモとあればハヤミとよみて可なるのみならずこゝは漢文直譯調なるが面白きなればなほハヤミとよむべし。○結句の落を舊訓にチルとよめるを略解にはオツに改めたり。なほ舊訓に従ふべし。

久米女郎報贈歌一首

世のなかも常にしあらねば屋外爾有さくらの花の不所比日かも

世間毛常爾師不有者屋戸爾有櫻花乃不所比日可聞

此歌の第三句もヤドナルとよむべし。文字には爾をあらはして書けるを訓にはナ

ルとつづめてよめる例集中に多し。○結句を舊訓にチレルコロカモとよみたれどチルコロとはいふべくチレルコロとは云ふべからず。否こゝはコロといふべき處にあらず。おそらくは誤は比日にあるべし。試にいにはば不所折可聞にてヲレザラムカモか。もし然らばワガ宿ノ櫻ノ花ノ獨折レズニアラムヤハの意とすべし。

紀女郎贈大伴宿禰家持歌二首

戲奴がため吾手もすまに春の野にぬける茅花ぞめしてこえませ

戲奴和氣之爲吾手母須麻爾春野爾拔流茅花曾御食而肥座

ワケは奴といふ事にて自稱なると對稱なるとある事、こゝに戲奴と書けるはもと戯れてワケといへるなれば其意をさとさむが爲に戲奴と書けるなる事、さては又ワケとよまれねば註を挿みたるなる事、卷四(六七六頁)にいへる如し。初句を俗語にうつさばソチノタメとうつすべし。○註の變は即反なり。卷五好去好來歌にも反云大命、反云布奈能閑爾とあり。いにしへ變反を通用せしなり。木村博士の訓義辨證にくはしく云へり。就いて見べし。さて反はカヘシテとよむべし。翻譯の翻と同意なり。○手モスマニを契沖は「手モヤマズと云意なるべし」といひ宣長は「數ニの意歟」とい

へり。スマニは不休にて(不知をシラニといふを思へ)いにしへヤスムをスムといひ
しか○いにしへ茅花^{ツバガ}を食へば肥ゆといふ俗信ありしなるべし

晝はさきよるはこひぬるねぶの花君^ミのみ見めやわけさへに見よ

晝者咲夜者戀宿合歡木花君耳將見哉和氣佐倍爾見代

右攀折合歡花并茅花贈也

コヒヌルは戀ヒテ寢ルなり。ヌルはテニヲハにあらず。そのコヒヌルを代匠記に

合歡木の葉の暮に巻くは人を戀る人の獨寢るやうなれば夜ハコヒヌルといへ
り

といへるはいかが葉の兩半の相合ふを男女の相寢るにたとへたるなり。さて男女
の相寢るにたとへつべきは葉にして花にあらず。さればヨルハコヒヌルネブノハ
ナとはつづくべからず。或はヨルハコヒヌルはネブのみにかゝりてハナまではか
からぬにやと思ふに初句のヒルハサキはハナまでかゝれる辭なればヨルハコヒ
ヌルも亦ハナまでかゝれりと見ざるべからず。所詮措辭の當を得ざるなり。強ひて
釋かば晝ハサキ夜ハ葉ノコヒヌルネブノ花といふべき葉ノを略したるなりとも

いふべし○第四句の君は略解に吾の誤なる事しるしといへり

紀女郎と家持との贈答は卷四の末にも見えたり。女郎は家持より年長けたる婦人
にて家持のねもころにいひ寄るには従はで然も常に之に戯れしなり。二人の贈答
を見るには此事を知りおかざるべからず○攀は折に通用せるなり。下にも攀橘花
など書けり

大伴家持贈和歌二首

吾君に戯奴^{ツケ}はこふらし給^{タビツケル}有つばなを雖喫^{クド}いややせにやす

吾君爾戲奴者戀良思給有茅花乎雖喫彌瘦爾夜須

こゝのワケは自稱なり。略解に「そのワケとのたまふ我はといふ意也云々」と釋き古
義に「其方のワケとのたまふ我は云々」と釋けるは非なり○給有を舊訓略解にタマ
ヒタルとよめるを古義にタバリタルに改めたり。タマフの古言タブなる事はやく
卷二(一七七頁)にいへり。卷十八にもハリブクロコレハ多婆利奴とあり○雖喫は舊
訓にクヘドとよめるを代匠記に「ハメドとも讀べし」といひ古義に「ハメドとよむべ
し」といへり。いづれにてもあるべし

吾妹子が形見のねぶは花のみにさきてけだしく實にならじかも
吾妹子之形見乃合歡木者花耳爾咲而蓋實爾不成鴨

こゝのカタミノはクレタルといはむが如し。卷十六なる商變領爲跡之御法アラバ
コソ吾下衣カヘシタマハメの左註に寵薄之後還賜寄物云々とありて寄物の註に
俗云可多美とあり○花ノミニは後世の花ニノミニなり。ケダシクは或ハなり○ナラ
ジカモは成ラザラムカとなり。卷三(四六四頁)に君ニアハジカモとあると同例なり
(四六七頁及六二八頁参照)

茅花と合歡花とは時節齊しからず。これについて略解には

茅花は三月、合歡の花は六月比さくなれば時異なり。是は藥に服せんために拔て
たくはへ置たるを贈れるなるべし

といひ考には

前の歌は茅花にて春なり。合歡木の花は六月咲ければ夏なり。仍て一時の歌なら
ねど同じ人と同じ意をよみかはせるなれば思ひ出る序にかくかゝれしならん
といひ古義は略解の説に従へり。もし春抜きて貯へたる茅花を合歡花と共に贈り

しならむには此贈答の歌は夏相聞に入るべきなり。略解古義の説はうべなひがた
し。しばらく考の説に従ふべし

大伴家持贈坂上大嬢歌一首

春霞たなびく山の隔者妹にあはずて月ぞへにける

春霞輕引山乃隔者妹爾不相而月曾經爾來

右從久邇京贈寧樂宅

第三句を舊訓にヘダタレバとよみ略解古義にヘナレレバとよめり。ヘダツレバと
いふべきが如くなれど集中の例によればなほヘダタレバ(又はヘナレレバ)とよむ
べし。更に下なるタブテニモナゲコシツベキ天ノ河といふ歌の處にいふべし

夏雑歌

藤原夫人歌

明日香清御原宮御宇天皇之夫人也
曰大原大刀自即新田部皇子之母也

ほととぎすいたくななきそながこゑを五月の玉に相貫左右二

霍公鳥痛莫鳴汝音乎五月玉爾相貫左右二

古義に「夫人はキサキとよむべからず。オホトジとよむべし」といふ論あり。案ずるに音にてフジンとよむべし。晴には藤原夫人といひ褻には大原、大刀自といひしなり。夫人をオホトジとよむべしといふはなほ閣下をトノサマとよむべしといはむが如し。萬葉時代には人物事物の名稱を悉く訓讀せし如く思はむは非なり。此時代の人は今人の思ふ如く保守的にはあらざりしなり。○夫人歌の下に一首の二字を補ふべし

契沖いへらく

五月玉は藥玉なり、、相貫はアヘヌクと讀べし。古語の例なり、、霍公鳥の聲は貫交へらるゝ物にあらねど賞する餘にさるはかなき事をも讀ことに侍りといへり。相貫は契沖の説の如くアヘヌクとよむべし。卷十七に

わがせこはたまにもがもなほとゝぎすこゑに安倍奴伎手にまきてゆかむ
卷十八に

白玉をつつみてやらなあやめぐさはなたちばなに安倍母奴久我禰

とあり。さて玉ニアヘヌクは玉トシテ外ノ物ト交ヘテ貫クなり。○マデニはマデハと心得べし。集中にマデニといへるはただマデの意なるとマデハの意なるとあり(卷七三四〇参照)

志貴皇子御歌一首

神なびの磐瀬の杜のほととぎす毛無のをかにいつか來なかむ

神名火乃磐瀬乃杜之霍公鳥毛無乃岳爾何時來將鳴

カムナビノイハセノ杜ははやく上(一四八三頁)に見えたり。○毛無は舊訓にナラシとよめり。漢籍に植物を毛といへり(左傳に土之毛、史記鄭世家、出師表などに不毛とあり)。今は人のふみならず地は草木の生せざるによりてナラシに毛無と書けるなりといふ。さて龍田考(四二丁)に

奈良思岡とよめるは岩瀬杜のあたりより東南をかけて弘く南さがりの岡なるを古くより悉畑にすぎかへしていと弘き畑あり。此あたりを古へよりひろくナラシノ岡といへりしなるべし

といへり。○イツカ來ナカムはハヤ來ナケカシとなり

弓削皇子御歌一首

ほととぎすなかる國にもゆきてしがそのなくこゑをきけばくるしも
霍公鳥無流國爾毛去而師香其鳴音乎聞者辛苦母

クルシはワビシなり

小治田廣瀬王霍公鳥歌一首

ほととぎすこゑきく小野の秋風にはぎさきぬれや聲のともしき
霍公鳥音聞小野乃秋風芽開禮也聲之乏寸

ここのトモシは少シなり ○略解に

此歌は今秋風立て芽子咲るにあらず。いまだ夏なるにほととぎすの聲の少く乏
しきは夏の中より秋風立てはぎが花など咲るにやあらむといふ意也

といへるは代匠記によれるにて全然誤れり。もとより仲夏の歌にはあらで晩夏又
は初秋の歌なり。第二句のこエキクはこエキキシといふべきを現在格にいへるな
り。此例集中に多し。キクをキキシと心得れば通せざる所無きなり。○こエといふ語

二つあり。下の聲をソノコエと譯すべし

沙彌霍公鳥詞一首

(足引の)山ほととぎすながなければ家なる妹し常におもほゆ
足引之山霍公鳥汝鳴者家有妹常所思

代匠記に

沙彌とのみあるは誰ぞ、、、集中に三方沙彌沙彌滿誓沙彌女王あり。歌に家有
妹とあれば滿誓と女王との歌にあらぬ事明なれば三方沙彌なるを三方の二字
を脱せる歟

といへり ○オモホユはシノバルなり

刀理宣令歌一首

(もの)のふのいはせの杜のほととぎす今もなかぬ△山の常影に
物部乃石瀬之杜乃霍公鳥今毛鳴奴山之常影爾

ナカヌカはナケカシなり ○トカゲを眞淵は本蔭の略にて木蔭の意なりといひ谷

川士清は常陰トコカゲの義なりといひ、宣長は「タヲ陰也。山のたわみたる處をタヲともタワともいふ」といへり。タヲといふ語、今も中國などに残り、但そは峠の事なり。しばらく和訓栞の常陰といふ説に従ふべし。○奴の下に香をおとせるか

山部宿禰赤人歌一首

こひしけば形見にせむとわがやどにうゑし藤浪今さきにけり
戀之家婆形見爾將爲跡吾屋戸爾殖之藤浪今開爾家里

コヒシケバはコヒシカラバなり。契沖は

此歌は前後霍公鳥をよめる中にあれば發句は霍公鳥を指て云なり
といひ古義には

形見は女の形見を云るなるべし。契沖がほととぎすをいへりと云るはあらじ
といへり。案するにホトトギスガ戀シカラバと云へるたり。○さて此歌は元來長歌
の反歌なるを長歌の失せて反歌のみ残れるならむ

式部大輔石上堅魚朝臣歌一首

ほととぎす來なきとよもすうの花の共也來之登とはましものを
霍公鳥來鳴令響宇乃花能共也來之登問麻思物乎

右神龜五年戊辰太宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇病長逝焉。于時
勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣太宰府弔喪并贈物色。其事既畢
驛使乃府諸卿大夫等共登記夷城而望遊之日乃作此歌

第四句は舊訓にトモニヤコシトとよめり。代匠記に

霍公鳥は卯花にしたしき鳥なればなき人の魂と共にや來しと云はむ爲に來鳴
令響宇乃花能とは云へり

といひ略解に「妻のなき魂も共に來りしやといふなるべし」といひ又

宣長云。又思ふに來○第四句のは成の誤にて、さて二の句にて切て三四の句はム
タヤナリシトと訓べくも見ゆ。帥卿の妻は卯花の散失たると共にうせて行へも
なく成しやと郭公に問はんものを也といへり

といへり。案するに此歌は第二句にて切りて心得べく、第四句はもとのまゝにて舊

訓の如くトモニヤコシトとよむべし。又ウノハナノトモニヤはウノ花ト共ニヤといはむに齊し。例は卷五(八八三頁)にアメツチノトモニヒサシク云々とあり。元來旅人の妻の事をかけていへるにあらず。ただ子規の啼くを聞きて

子規ゾ啼クナル、モシ言ドフベクハ卯花ノサキシト共ニヤ來リシト問ハムモノヲ

といへるのみ

左註の贈は賜乃は及の誤なるべしと契沖いへり。物色は物品なり。祈年祭の祝祠に種々色物と書けるとおなじかるべし。下にも物色とあるそれとは異なり。○記夷城は代匠記に

紀國を紀伊と云如く記の韻の夷を加へて城山の邊のただキと云所なるべしといへり。天智天皇紀四年に

秋八月遣達率憶禮福留達率四比福夫○百濟人於筑紫國築大野及椽二城

とあり文武天皇紀二年に

五月甲申令太宰府繕治大野、基肄、鞠智三城

とあるキノ城にて卷四(六九一頁)及卷五(八九八頁)に見えたるキノ山にありき。城、山は筑前肥前兩國に跨れる山にて太宰府の西南に當れり。今坊中山といふ

太宰帥大伴卿和歌一首

橘の花ちる里のほととぎす片戀しつつなく日しぞおほき

橘之花散里乃霍公鳥片戀爲乍鳴日四曾多寸

代匠記に

橘の花の散をば死せる妻によそへ霍公鳥の鳴をばみづから譬ふ

といひ略解古義共に之に従へるは非なり。ただ子規に己をよそへたるのみ。三註の説の如くならば少くともタチバナノチリニシ里ノといはざるべからず

大伴坂上郎女思筑紫大城山歌一首

今もかも大城の山にほととぎすなきとよむらむ吾なけれども

今毛可聞大城乃山爾霍公鳥鳴令響良武吾無禮杼毛

坂上郎女の筑紫にありしは天平二年にて其年の冬京に還り上りしなり(一〇七二)

頁參照○大城山は元曆校本卷十大城山者色付爾家里の註に

謂大城者在筑前國御笠郡之大野山頂號曰大城者也

とあり。大野山とも四王寺山ともいふとぞ。大野ははやく卷四(六八三頁)に、大野山も卷五(八四九頁)に見えたり

大伴坂上郎女霍公鳥歌一首

なにしかもここばくこふるほととぎすなくこゑきけば戀こそまさされ
何哥毛幾許戀流霍公鳥鳴音聞者戀許曾益禮

略解に

上のコフルは郭公を戀ふるにて下のコヒは人をこふる也。何故にかく郭公をこふるぞ、聲きけば人こひしさのまさると也
といへる如し。ココバクは大サウなり

小治田朝臣廣耳歌一首

獨るて物おもふよひにほととぎすこゆなきわたる心しあるらし

獨居而物念夕爾霍公鳥從此間鳴渡心四有良思

略解に

コユはココヨリ也。物思をなぐさめがほに鳴わたるは心有るに似たりと也
といへる如し。但コユは此處ヲなり。古義は心シアルラシを誤解せり

大伴家持霍公鳥歌一首

うの花もいまださかねばほととぎす佐保の山邊來なきとよもす
宇能花毛未開者霍公鳥佐保乃山邊來鳴令響

サカネバはサカヌニなり。山邊を舊訓略解にヤマベヲとよめるを古義にヤマベニ
とよめり。げに卷十五に

あまごもりものもふとぎにほととぎすわがすむさと爾きなきとよもす
とあれどそは乎の誤とおぼゆればここもヤマ邊ヲとよむべし

大伴家持橘歌一首

わがやどの花たちばなのいつしかも珠にぬくべく其實成奈武

吾屋前之花橘乃何時毛珠貫倍久其實成奈武

成奈武は舊訓の如くナリナムとよむべし(一五〇五頁参照)〇タマニヌクのニはトにかよふニにて橘の實の小さきを絲に貫きて藥玉とするなり

大伴家持晚蟬歌一首

こもりのみをればいぶせみなぐさむといでたちきけば來なく日ぐらし

隱耳居者鬱悒奈具左武登出立聞者來鳴日晚

晚蟬は夕方に鳴く蟬の意にて書けるにて即ヒグラシなり〇イブセミはウツタウシサニなり。ナグサムトは心ヲ慰メムトテなり〇餘意は古義に外に出立て聞ば又ひぐらしの來鳴てあはれを催すよとなりといへる如し

大伴書持歌二首

わがやどに月おしてれりほととぎす心有今夜きなきとよもせ

我屋戸爾月押照有霍公鳥心有今夜來鳴令響

ヤドは庭前なり。オシテレリは押並ベテ照リタリとなり。卷七(一二二三頁)にもカスガ山オシテテラセルコノ月ハ云々とあり〇第四句は從來ココロアルコヨヒとよみたれど有の下に者を補ひて(又はもとのまゝにて)ココロアラバコヨヒとよむべし(はやく考にはかくよめり)九言となるは快からねど

わがやどの花橘にほととぎす今こそなかめ友にあへる時

我屋前乃花橘爾霍公鳥今社鳴米友爾相流時

第四句は啼カバ今コソ啼カメとなり

大伴清繩歌一首

皆人のまちしうの花ちりぬともなくほととぎす吾わすれめや

皆人之待師宇能花雖落奈久霍公鳥吾將忘哉

子規を卯花と終始を共にするものと定め、さて卯花散リテ子規啼カズナルトモ我ハ子規ヲ忘レジといへるにや。心得がたきは歌の拙きなり

庵君諸立歌一首

わがせこがやどのたちばな花をよみなくほととぎす見にぞわがこし
吾背子之屋戸乃橘花乎吉美鳴霍公鳥見曾吾來之

花ヲヨミはナクにかゝれり。ワガセコは友に對していへるなり

大伴坂上郎女歌一首

ほととぎすいたくななきそ獨ゐていのねらえぬにきけばくるしも
霍公鳥痛莫鳴獨居而寐乃不所宿聞者苦毛

イは睡眠、クルシはワビシ、獨キテは夫ト共ナラデといふ意

大伴家持唐棣花歌一首

夏まけてさきたるはねず(久方の)雨うちふらばうつろひなむか

夏儲而開有波禰受久方乃雨打零者將移香

夏マケテは夏ニチカヅキテなり。卷七夏影房之下庭の處(一三六四頁)にいへり○ハ

ネズは木蓮なるべし(卷四七頁參照)毛詩召南の唐棣之華をキバチスノハナとよみ
ならひたるも木蓮と心得ての事ならむ。木蓮は今モクレンといひてキバチスとい
はず。今はムクゲの事をキバチスといへどいにしへは木蓮をキバチスといひ更に
それより前はハネズといひしなるべし。木蓮の形はげに蓮花に似たり○ウツロフ
は色のかはるなり。モクレンは風雨に逢へば黒くなるものなり

大伴家持恨霍公鳥晚喧歌二首

わがやどの花橘をほととぎす來なかず地に令落常香

吾屋前之花橘乎霍公鳥來不喧地爾令落常香

結句は契沖のチラシメムトカとよめるに従ふべし。第四句は來ナカズシテイタヅ
ラニ地ニとなり

ほととぎすおもはずありきこのくれのかくなるまでに奈何來なかぬ
霍公鳥不念有寸木晚乃如此成左右爾奈何不來喧

奈何は卷十九にヤマホトトギス奈騰可キナカヌと書きたれば舊訓の如くナドカ

とよみて可なり(古義にはナニカに改めたり)。コノクレは樹陰なり。○木ノクレノカクナルマデ來ナカザラムトハ思ハザリキ、ナドカ來ナカヌといふべきを略せるなり。略解古義の釋わろし

大伴家持權霍公鳥歌一首

何處者^{ウケ}なきもしにけむほととぎす^{ウケ}吾家の里にけふのみぞなく
何處者^{ウケ}鳴毛思仁家武霍公鳥吾家乃里爾今日耳曾鳴

初句は略解古義共にイヅクニハとよみ略解にはヨソニハといふが如しといひ古義には何處ゾニハといふなりといへり。果してイヅクニハとよむべくばげにドコゾヨソニハといふ意と見べし。○ケフハジメテなどあるべきをケフノミヅといへる耳だちて聞ゆ。古義にはノミとはすぎし日に對へていへるなりといへり

大伴家持惜橘花歌一首

わがやどの花橘はちりすぎて珠にぬくべく實になりにつけり
吾屋前之花橘者落過而珠爾可貫實爾成二家利

チリスギテはチリウセテ、珠ニは珠トなり

大伴家持霍公鳥歌一首

ほととぎすまでど來なかずあやめ草玉にぬく日をいまだ遠みか
霍公鳥雖待不來喧蒲草玉爾貫日乎未遠美香

アヤマヲ珠ト貫カム日ガマダ遠キ故ニカとなり。菖蒲を玉と貫くといへるは菖蒲の根を小さく切りて絲に貫きしなるべし。○蒲の上に菖をおとせるならむ

大伴家持雨日聞霍公鳥喧歌一首

うの花のすぎばをしみかほととぎす^{アヤマ}雨間もおかずこゆなきわたる
宇乃花能過者惜香霍公鳥雨間毛不置從此間喧渡

スギバは散ラバなり。略解に盛ノスギンガ惜シサニカと譯せるは非なり。さてスギバといはばヲシカルベミといふべきを今の如くいへるは當時許容の語法にてはやく卷二以下に見えたり。卷四(七九)○夏なる君ガ名タタバヲシミコンナケの處にいへるを参照すべし。○雨間モオカズは代匠記に雨のふる間をもおかずなりとい

ひ古義に

こゝの雨間は雨のふる間をいへるなり。此下に久堅ノ雨間モオカズ雲ガクリナ
キゾユクナルワサ田雁ガネとある、もはら同じ。十二にカミナヅキ雨間モオカズ
フリニセバタガ里ノマニ宿カカラマシとある雨間は雨の晴間をいへるなり。歌
によりて意異なり

といへり

橘歌一首 遊行女婦

君が家の花たちばなはなりにけり花乃有時ハナノアルトキニにあはましものを

君家乃花橘者成爾家利花乃有時爾相益物乎

遊行女婦は和名抄によりてウカレメともアソビともよむべし○ナリニケリは實
ニナリニケリとなり○第四句を契沖始めてハナナルトキニとよみ略解古義共に
之に従へり。案ずるにハナナルトキニとよむべくは花爾ハナノアル有時爾とあらざるべから
ず。即乃を爾の誤字とせざるべからず。乃とあるを正しとせばハナノアルトキニと
よむべし○四五はマダ花ノアル時ニ來ベカリシヲとなり○古今集春下よみ入し

らずの

蛙なく井手の山吹ちりにけり花の盛にあはましものを

と相似たり。但歌は古今なる方遙にまされり

大伴村上橘歌

わがやどの花たちばなをほととぎす來なきとよめて本にちらしつ

吾屋前乃花橘乎霍公鳥來鳴令動而本爾令散都

本を古義に土の誤とせり。もとのまゝにて可なり。モトは木ノモトなり

大伴家持霍公鳥歌二首

夏山のこぬれの繁爾シガニほととぎすなきとよむなる聲のはるけさ

夏山之木末乃繁爾霍公鳥鳴響奈流聲之遙佐

繁爾を契沖はシジニとよみ略解古義共に之に従へり。卷三(五七五頁)なる同じ人の
作歌にイクデ山木立ノ繁ニサク花モウツロヒニケリとある處にいへる如くシゲ
ニとよみてシゲミニの意とすべし。因にいふシゲミも後世の語にあらず。集中に例

あり。たとへば下に夏ノ野ノ繁見ニサケル姫ユリノ云々とあり

(足引の)このまたちくくほととぎすかくききそめて後こひむかも

足引乃許乃間立八十一霍公鳥如此開始而後將戀可聞

アシヒキはこゝにては山の換語なり。卷三五〇二頁にもアシヒキノイハ根コゴシ
ミとあり。〇タチククはタチクグルなり。クグルといふべきをククといへるは連體
格の代に終止格をつかへるなり(一四八一頁参照)。さて略解に

上のクをすみ下のクを濁るべけれど、上を濁るはいひ下せる音便の例也
といへるは非なり。いにしへはタチクク、タチククルともに清みてとなへしなり。ク
クリノ宮、クキデテ、クキシなど皆濁らぬを思ふべし。〇四五は寧キキノメズバコヒ
ム事モアルマジキニといふ意を含めり

大伴家持石竹花歌一首

わがやどのなでしこの花さかりなりたをりて一目みせむ兒もがも
吾屋前之瞿麥乃花盛有手折而一目令見兒毛我母

古義に

この盛なる間手折てただ一目見せまほしく思ふにその見すべき女もがな、いか
で早く來れかしと也

といへり。案するにミセム兒モガモといへばただ見スベキ女モアレカシといふや
うに聞ゆれど卷九なる

いゆきあひの坂のふもとにさきををるさくらの花をみせむ兒もがも

と合せ考ふるに今ココニアレカシといふ意にて畢竟妹ニ見セマホシといふ意な
り。さればイカデ早く來レカシとは釋くべからず。但卷十なる

青柳のいとのかはしさ春風にみだれぬ伊まにみせむ子もがも
はミダレヌ伊マニ(亂レヌウチニ)とあれば來レカシとも釋くべし

惜不登筑波山歌一首

筑波ねにわがゆけりせばほととぎす山びことよめなかましやそれ
筑波根爾吾行利世波霍公鳥山妣兒令響鳴麻志也其

右一首高橋連蟲麻呂之歌△中出

略解に

宣長云。ナカマシヤは鳴ハセジといふ意也。此歌は筑波根に行し人の郭公のしげく鳴たる事を語りたるを聞てよめるにて吾行タランニハシカ繁クハナクマジキニ恨メシキ郭公カナとよめる也。といへり
といへり。此説の如くなるべし。○ソレは子規をいへるなり。第三句にホトトギスとあれば更にソレといはむは不用なるを、かく云へるは卷七(一二三六頁)にミモロノソノ山ナミニ云々といへる類なり。○左註の歌の下に集の字おちたるか

夏相聞

大伴坂上郎女歌一首

いとまなみ不來之君にほととぎすわがかくこふとゆきて告げこそ
無暇不來之君爾霍公鳥吾如此戀常往而告社

ツゲゴソは告ゲナムなり。子規にあつらへたるなり。○略解に

新千載集戀に二句キマサヌキミニとてのせたり。之は座の字の誤なるべし
といへり。げに然らむ

大伴四繩宴吟歌一首

事しげみ君は來まさずほととぎすなれだに來なけ朝戸開かむ
事繁君者不來益霍公鳥汝太爾來鳴朝戸將開

アサ戸ヒラカムは朝ノ戸ヲ開キテ迎ヘムとなり。君ハ來マサズは此頃來マサズといふにはあらで昨夜ハツヒニ來マサザリキといふ意なり。然見ざれば朝戸ヒラカムと云はむ由なし。三註みな徹底せず。さてアサ戸とはあれど夜の明果てよめるにはあらで曉深くよめるなるべし。○集中にコトシゲシといへるにはイトマナシといふと、人ノ口ガウルサシといふと二様ある如し。但コトを事とかけると、辭とかけるとあれど文字には拘はるべからず。人言の意とおぼしきに事とかき、人事の意とおぼしきに辭とかける處もあればなり。さて下なるコトシゲキリニスマズバ云々は人言ノウルサキといふ意なること明なれどこゝはイトマナミの意なるべし。

古今集の序にも世ノ中ニアル人、事ワザシゲキモノナレバとあり

大伴坂上郎女歌一首

夏の野のしげみにさける姫ゆりの知らえぬ戀はくるしきものを
夏野乃繁見丹開有姫由理乃不知所戀者苦物乎

上三句は序、シラエヌは相手ニ知ラレヌなり

小治田朝臣廣耳歌一首

ほととぎすなく峯の上のうの花のうき事あれや君が來まさぬ
霍公鳥鳴峯乃上能宇乃花之厭事有哉君之不來益

上三句は序、ウキコトアレヤは我ニ對シテ不快ナル事アレバニヤとなり

大伴坂上郎女歌一首

五月之花橘を君がため珠に△ぬけ零卷をしみ
五月之花橘乎爲君珠爾貫零卷惜美

初句の之を古義に山の誤としてサツキヤマとよめり。誤ならずとは断定せられざ

れど、もとのまゝにて通ずればなほサツキノとよむべし。○零卷を舊訓にチラマク
とよめるを略解にオチマクに改めたり。これももとのまゝにてあるべし。○爾の下
に社をおとしたるならむ

紀朝臣豊河歌一首

わぎもこが家の垣内のさゆり花ゆりと云者不謂云二似
吾妹兒之家乃垣内乃佐由理花由利登云者不謂云二似

上三句は序なり。○ユリは卷十八に

ともし火のひかりに見ゆるさゆりばな由利毛あはむとおもひそめてき
さゆりばな由利毛あはむとおもへこそいまのまさかもうるはしみすれ
なでしこが、そのはなづまに、さゆり花、由利母あはむと云々
さゆり花由利母あはむとしたばふるころしなくば今日もへめやも
とあり。宣長いはく

集中に後ニといふ事をユリといへる例これかれ有。此歌のユリも後ニといふ事
にて後ニアハムといふ也

といへり。げにノチニといふこと、おぼゆ○不詔を宣長は不許の誤として
 或人不許云二似なるべし。後ニアハントイフハ不許トイフニ似タリと也
 といへり。下にもイナニハアラズを不許者不有と書けり○さて四五を古義にユリ
 トイヘレバイナチフニニツとよめり。宜しくユリトイヘルハイナチフニニルとよ
 むべし。下なるキキツヤト君ガトハセルホトトギスのトハセルと同格なり。妹ノ答
 ニ後ニトイヘルハイナ逢ハジトイハムニ似タリとなり。似はノルともよむべし

高安歌一首

いとまなみ五月をすらに吾妹兒が花橘を見ずか過ぎなむ

暇無五月乎尙爾吾妹兒我花橘乎不見可將過

略解に「卷三高安大島といふ是か」といひ古義に「一卷に高安大島とあると同じきか。
 又は高安王なるべきが王字落たるか」といへり
 サツキヲスラニは略解に橘ノ時ナル五月ヲスラと譯せり○三四は我妹子が家ノ
 花橘ヲとなり

大神ノ女郎贈大伴家持歌一首

ほととぎすなきし登時君が家にゆけと追ひしは至りけむかも

霍公鳥鳴之登時君之家爾往跡追者將至鴨

略解に
 君が待らんとおもひて郭公にとくゆけといひをしへ追やりつるはいたりきや
 と戯れてよめり
 といへる如し。こゝのオヒシは嫌ひて追ふ意にあらず

大伴田村大嬢與妹坂上大嬢歌一首

古郷のならしのをかのほととぎす言つげやりしいかにつげきや

舌郷之奈良思之岳能霍公鳥言告遣之何如告寸八

ナラシノ岡は上一五二一頁に見えたり。このあたり大伴氏の本郷なりし故にフル
 サトノといへるなり(一〇七七頁参照)さて田村大嬢は此時故郷に歸りたりしなり
 ○第四句の下にハを補ひて聞くべし。即子規ニ言葉ヲ告ゲテ遣リシハとなり○結

句はツゲキヤイカニといふべきを調の爲に顛倒して今の如くいへるなり。イカニ
ツゲキヤとつづけては聞くべからず。イカニといはば告ゲシヅ、告ゲシカなどいふ
べくツゲキヤとはいふべからざればなり。はやく古義に

告シヤ如何ニアリシといふ意なり。何如の言を下に置いて心得べし。イカヤウニ告
シヤといふ意にきゝては甚わろし

といへり。但同書に

ツゲキヤはツゲシヤといふ意なり。かやうにシヤといふ意なる所をキヤと云は
古歌の格なり

といへるはいみじきひが言なり。昔も今もキヤとこそいへ、シヤとは云はず

大伴家持攀橘花贈坂上大嬢歌一首并短歌

いかといかと 有わがやどに 百枝さし おふる橘 玉にぬく 五
月を近み あえぬがに 花さきにけり 朝にけに 出見る毎に い
きのをに わがもふ妹に (まそ鏡) 清き月夜に ただひとめ みせ

むまでには ちりこすな ゆめといひつつ ここだくも わがもる
物を うれたきや しこほととぎす 曉の うらがなしきに おへ
どおへど なほし來鳴きて いたづらに 地にちらせば すべをな
み よぢてたをりつ 見ませ吾妹兒

伊加登伊可等有吾屋前爾百枝刺於布流橘玉爾貫五月乎近美安要奴我
爾花咲爾家里朝爾食爾出見每氣緒爾吾念妹爾銅鏡清月夜爾直一眼令
觀麻而爾波落許須奈由米登云管幾許吾守物乎宇禮多伎也志許霍公鳥
曉之裏悲爾雖追雖追尙來鳴而徒地爾令散者爲便乎奈美攀而手折都見
末世吾妹兒

攀は攀登攀縁など用ひてトリツクなどいふに當る文字なれど我國にてヨツとよ
みたるそのヨツは青柳ノホツエ興治トリ(卷十九)などいひて折る意なればこゝも
折橘花と書く代に攀橘花と書けるなり。されば橘花ニヨヂテとはよまで橘花ヲヨ
ヂテとよむべし

イカトイカトのイカはイカニにてイカトはイカニトといはむにおなじ。今イカとのみは云はざればイカトとありては辭足らざるやうに思はるれど元來イカニのニは添へたる辭に過ぎずして主語はイカなればマコトニ、ノチニをマコト、ノチとのみもいふが如くイカニをイカとのみいひてもよき理なり。さればイカトイカトはドウカトドウカトとうつすべし。大平が伊追之可等の誤とせるは従はれず○有は大平が待の誤とせるに従ふべし。モモエサシはアマタノ枝ガ出デテなり○アエヌガニのガニはバカリニなり(卷四三七頁○参照)ヌはサキヌベシ、チリヌバカリニなどのヌなり。アユを宣長(玉勝間卷十三)千蔭が或は實のなる事とし或は實の熟することとせるに對して久老(信濃漫錄九丁)は

西國にて菓の類の梢にあるを落し取るをアヤスといひおのづから落るをアユルといふ。すべてものゝ落こぼるゝをいふといへり。是古言なり云々

といひ(守部の山彦冊子卷三四丁)に自説のやうに書けるは人わろし(廣足かしの朽葉卷三丁)は

此語は西國には今も残りて常いふことなればアユル實といへば落る實なる事

註をまたずして兒童もよく知る事なるを近ごろやうやう聞しりて久老が病床漫録にいへるをとりて橘守部がくはしくいひたればアユルは落るなる事世に明らかになりぬ云々

といへり。我播磨にても菓などの落つるをアエルといふ。さればアエヌガニはオチルホドとなり○アサニケニは毎日なり。イキノヲニは大切ニなり。ココダクモは少カラズなり○ウレタキヤのヤは助辭にてウレタキシコホトトギスとつづけるなり。そのウレタキはイキドホロシキなり。シコは杜鵑を罵りていへるなり。シコノマストラヲ、シコノシコ草などはやくありき。ウラガナシは心の衷の悲しきなり○イタヅラニ地ニチラセバ云々は子規の來鳴く頃恰橘花の散るを子規の鳴きて橘花をちらすやうにいへるなり。上にも

わがやどの花たちばなをほととぎす來なきとよめて本にちらしつとよめり。スベヲナミは散ルヲ防グスベナケレバとなり

反歌

もちくだち清きつく夜に吾妹兒にみせむともひしやどの橘

望降清月夜爾吾妹兒爾令觀常念之屋前之橘

モチクダチは十五日以後ノとなり。結句はヤドノ橘ゾ是ナルといふべきを省けるなり

妹が見て後もなかなむほととぎす花橘を地に落津

妹之見而後毛將鳴霍公鳥花橘乎地爾落津

落津は略解にオトシツとよみ古義には舊訓によりてチラシツとよめり○第二句は後ニ啼ケバヨイニとなり。卷十にも

默然ナホもあらむ時母トキモ鳴奈武ナカフひぐらしの物もふ時になきつつもとなとあり

大伴家持贈紀郎女作歌一首

なでしこはさきてちりぬと人はいへどわがしめし野の花ならめやも
瞿麥者咲而落去常人者雖言吾標之野乃花爾有目八方

題辭の作の字は衍

第二句のサキテはただ軽く添へたるにてチリヌといふが主なり○卷三四九一頁なる駿河麻呂の

うめの花さきてちりぬと人はいへどわがしめゆひし枝ならめやも
を學べるにてなつかしからず○一首の意は略解に

心ノカハレルト人ハイヘド吾思フ妹ガ事ニハアラデ他人ノ上ライフナランと
紀郎女をさしてよめる譬喩歌なり

といへる如し。古義の釋はわろし

秋雜歌

岡本天皇御製歌一首

ゆふされば小倉の山になく鹿のこよひはなかずいねにけらしも
暮去者小倉乃山爾鳴鹿之今夜波不鳴寐宿家良思母

岡本天皇は舒明天皇なり。卷九に重出せるには雄略天皇の御製とせり

小倉ノ山は卷九なる春三月諸卿大夫等下難波時歌にシラ雲ノ、タツ田ノ山ノ、瀧ノ上ノ、小鞍ノミネニとある小鞍、嶺とひとしきか○古義に釋ける如く四五の間に漸ク妻ヲ得テといふことを挿みて聞くべし

大津皇子御歌一首

たてもなくぬきもさだめずをとめらがおれる黄葉に霜なふりそね

經毛無緯毛不定未通女等之織黄葉爾霜莫零

第四句はオレルにつづけてはニシキニといふべく霜ナフリソネに續くるにはモミヂニといふべし。代匠記に

具足せる詞ならば黄葉ノ錦ヲ織といふべし。されどかゝる事は詩歌の習なれば算術などのやうにはきびしからぬが還て面白き事なり

といへり。さてニシキニといはむか、モミヂニといはむかと云ふにオレルニシキニ霜ナフリソネと云はむ方おもしろけれど黄葉と書けるをニシキとはよみがたければなほモミヂとよむべし

穗積皇子御歌二首

けさのあさけ雁がねききつ春日山もみぢにけらしわがこころいたし
今朝之旦開鴈之鳴聞都春日山黄葉家良思吾情痛之

結句はワガ心ナヤマシとなり。悲秋の意なり

秋はぎはさきぬべからしわがやどの淺茅が花の散去みれば
秋芽者可咲有良之吾屋戸之淺茅之花乃散去見者

散去は略解に従ひてチリヌルとよむべし。ベカラシはベカルラシなり

但馬皇子御歌一首 一部書云子
部王作

ことしげき里にすまざば 一云國に けさなきし雁にたぐひて去ましもの 去
を

事繁里爾下住者今朝鳴之鴈爾副而去益物乎 一云國爾不有者

但馬皇子とあるは但馬皇女の誤なり。類聚古集には皇女とあり。此皇女と穗積皇子と贈答したまひし御歌卷二二六三頁以下に見えたり。此御歌は皇子のケサノアサ

ケ雁ガネキキツといふ御歌の和なるべし。○スマズバは住マムヨリハなり。初句に事繁とある事は言の借字にてコトシダキは人言ノシダキなり。卷二一六六頁なる此皇女の御歌にも人言ヲシダミコチタミとあり。古義に「世間の繁務をいとはせ給へるときよみたまへるなるべし」といへるは借字に誤られたるなり。○結句は略解にイナマシモノヲとよめるに従ふべし。ヨソニ行カムモノヲとなり。雁ニタダヒテは雁ト一シヨニなり。○下は不の誤なり。

山部王惜秋葉歌一首

秋山に黄反木葉のうつりなば更にや秋を見まくほりせむ

秋山爾黄反木葉乃移去者更哉秋乎欲見世武

黄反は下に黄變とあるにおなじ。變反は集中に通用せり。但反を變を書けるは多く、變を反と書けるは少し。さて黄反を舊訓にキバム、略解にモミヅ、古義にニホフとよめり。略解に従ふべし。モミヅルコノハノといふべきをモミヅコノハノといへるは四段活に従へるにてもあるべく連體格の代に終止格をつかへるにてもあるべし。二四七六頁参照。○ウツリナバは散リナバとなり。四五は更ニ秋色ヲ見タシト思ハ

ムカとなり

長屋王歌一首

(味酒)三輪乃祝之山照秋のもみぢばちらまくをしも

味酒三輪乃祝之山照秋乃黄葉散莫惜毛

二三は舊訓にミワノハフリガヤマテラスとよめり。略解に二三の句は祝等が齋まつる山を照らすといふを略るか。されど句のつづき穩ならず。宣長云。三輪ノイハヒノヤマヒカルと訓べし。イハヒノ山は神を齋まつる山といふ事也。といへり。是然るべきか。といひ古義には第二句のみ宣長の訓に従へり。案ずるに類聚古集に三輪乃社之とあるに従ひてミワノヤシロノとよむべし。

山上臣憶良七夕歌十二首

あまのかはあひむきたちて一云わがこひし君きますなり紐ときまけ向河

天漢相向立而吾戀之君來益奈利紐解設奈 一云向河

右養老八年七月七日應令

ワガは織女になりていへるなり。紐トキマケナは紐ヲ解設ケムにて卷五(九七八頁)なる同じ作者の歌に紐トキサケテタチハシリセムと云へる如く襟の紐を解きて接待の準備をせむと云へるなり。古義に紐を下紐とせるはにがにがし。養老八年二月に神龜元年と改號せられしなれば八年七月とある八年は七年などの誤ならむ(一〇〇四頁参照)代匠記には八は六の字の上の二畫を失へるにやといへり。又同書に

應令は聖武天皇いまだ東宮にてましましける時の令旨に依てよまるゝなりといへり。續紀によれば憶良當時東宮の侍臣たりき。因にいふ。應令は皇太子にいひ、天皇の命によつて詠進するは應詔又は應制といふなり

(久方の)あまのかはせに船うけてこよひか君が我許きまさむ
久方之漢瀨爾船泛而今夜可君之我許來益武

右神龜元年七月七日夜左大臣家

左大臣は長屋王なり。○古義に漢の上に天を補ひたれど漢の字のみにてアマノカハとよみつべし。下にもアマノカハラを漢原と書けり

ひこぼしは たなばたつめと 天地の 別れし時ゆ (いな字しろ)
河にむきたち おもふ空 安からなくに 嘆く空 安からなくに
青浪に 望はたえぬ 白雲に なみだは盡きぬ かくのみや いき
づきをらむ かくのみや こひつつあらむ さにぬりの 小船もが
も 玉まきの 眞かいても一云小棹 朝なぎに いかき渡り 夕し
ほに一云夕 いこぎわたり (久方の) 天の河原に あまとぶや 領巾
かたしき 眞玉手の 玉手さしかへ 餘△△アツクヨモ いもねてしがも一云
しがねて 秋にあらずとも一云秋ま

牽牛者織女等天地之別時由伊奈宇之呂河向立意空不安久爾嘆空不安
久爾青浪爾望者多要奴白雲爾滯者盡奴如是耳也伊伎都积乎良牟如是
耳也戀都追安良牟佐丹塗之小船毛賀茂玉纏之眞可伊毛我母一云小棹 朝

柰藝爾伊可伎渡夕盥爾倍一云夕伊許藝渡久方之天河原爾天飛也領巾可
多思吉眞玉手乃玉手指更餘宿毛寐而師可聞一云伊毛左秋爾安良受登母
一云秋不待登毛

アメツチノワカレシ時ユはただ大昔ヨリといふことなり○イナ字シロの字は牟
の誤なり。顯宗天皇紀にもイナムシロカハヅヒヤナギとあり。河にかゝれる枕辭な
り○オモフ空ナゲク空の空は古義にココチと譯せり卷四一六頁參照○青浪ニ望ハ
タエヌ白雲ニ滯ハツキヌはわざと漢文の調を學びたるなり。三註共に之を發揮せ
ざるは不審なり。さてノゾミハタエヌとはいかなる意か。略解には

立浪にさへぎられて望見ること絶る也
といひ古義には

遙々の蒼浪を望み見やるに遠くして見届かねば目のつきたるをいふならむ
といへり。案ずるにノゾミは希望の義にて蒼波渺々トシテ河ヲ渡ラムノ望ハ絶エ
ヌといへるならむ。もし略解古義にいへる如く眺望の義にて目モトドカズナリヌ
といふことならむには相別れ相離るゝ時ならずばノゾミハタエヌとはいふべか

らず。其上眺望の義のノゾミは古書には見えす。次に白雲ニナミダハツキヌは白雲
ヲナガメアルニ涙ハ盡キヌとなるべし。辭を略して漢文調にいひたれば作者の意
を忖度する外は無し。さて滯は滴水にて涙の義なし。我邦にて啼の口扁を水扁に代
へてナミダに充てたるにや○カクノミヤのヤはヤハなり○サニヌリのサは添辭、
タママキは玉モテ飾レルなり。イカキ、イコギのイは添辭。カキは楫もて水をかくを
いふと略解にいへる如し○アマトブヤは古義にいへる如く空飛ブ料ナルといふ
ことなれど今は軽く枕辭のやうにつかひたるなり○カタシクは衣を敷きて寢具
とするをいふ○餘宿毛云々は宣長の説に

宿の字の上に一句落たるにて餘の字は其中の一字なるべし
といへり。古義には餘の下に多の字を補ひてアマタタビとよみて

多字舊本になきは脱たるなり。今は岡部氏の考によりてくはへつ
といへり。案ずるに餘夜毛宿毛寐而師可聞とありけむ夜毛をおとせるならむ。アマ
タヨモの語例は卷十五に

あすかがはせくとしりせば安麻多欲母ゐねてこましをせくとしりせば

とあり

反歌

風雲はふたつの岸にかよへどもわが遠づまの一云はしことぞかよはぬ
風雲者二岸爾可欲倍杼母吾遠孀之一云波事曾不通

風雲ハ云々も漢文の調をまなべるなり。代匠記に

發句は風ト雲トハなり。、、風と雲とは兩岸に往來すれども實の使ならねば

織女の言を傳へずと牽牛に成てよまれたり。注の波之孀はハシキ妻と云へるに

同じ

といへる如し。コトはタヨリなり

たぶてにもなげこしつべきあまのかはへだてればかもあまたすべなき

多夫手二毛投越都倍伎天漢徹太而禮婆可母安麻多須辨柰吉

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河△

一云帥家作

長歌と第一の反歌とに大河のやうにいへるを此歌の趣にてはさばかり大きな河とは聞えず。所詮狂言綺語なれば口に任せて深く意を致さざりしなり。○タプテはツブテなり。初句タプテ二毛とあるを古義に

二字はもと乎なりけむを手とまがへて多夫手々毛と書しをつひに二に誤れるなるべしと別府信榮は云り。然する時はタプテヲモと訓べし

といへり。案ずるにタプテニモはコスにかゝれるなればなほ二とあるべし。○ヘダテレバカモは今の情にて云はばヘダツレバカモといふべきをかく自動詞もて云へるは當時の辭づかひと見えて集中にあまた例あり。即卷四なる

こころゆも吾はもはざりき山河もへだたらなくにかくこひむとは(七〇八頁)

海山もへだたらなくになにしかも目言をだにもここだともしき(七六七頁)

ひとへ山へなれるものをつく夜よみ門にいでたち妹かまつらむ(八一六頁)

など是なり。○アマタスベナキは古義に

アマタは甚しく殊にすぐれたるをいふ。かやうの處に用ひたるは七卷に鳥ジモノ海ニウキキテオキツ浪サワダヲキケバアマタカナシモ十二に草枕タビユク

君ヲ人目オホミ袖フラズシテアマタクヤシモなどある是なり
といへり。前に引けるコゴダトモシキのコゴダと同意同格なり

左註の天河の下に作の字落たるかと契沖いへり。帥家は太宰帥大伴旅人の宅なり

秋風のふきにし日よりいつしかとわが待戀ひし君ぞきませる

秋風之吹爾之日從何時可登吾待戀之君曾來座流

これと次のとは織女になりてよめるなり

あまのかはいと河浪はたたねどもさもらひがたし近き此瀬を

天漢伊刀河浪者多多禰杼母伺候難之近此瀬乎

イトは後のイタクにあたれるか。後世の語法にてはイト立ツとは云はず○第四句
のサモラヒガタシを略解に

川瀬をうかがひ渡りがたきといふ也

といひ古義に

牽牛のもとにさぶらひがたし

と釋けり。古義の説非なり。卷六(一〇五四頁)に

風ふけば浪かたたむと伺候サモラヒにつたの細江に浦がくりをり

卷七(一二八三頁)に

大御舟はてて佐守布たかしまの三尾の勝野のなぎさしおもほゆ

などありてサモラフはうかがふ事なれば今も渡ルベキ機會ヲ伺ヒ得難シといへ
るなり○コノ瀬ヲのヲはナルニなり

袖ふらば見もかはしつべくチカケレド雖近チカケレドわたるすべなし秋にしあらねば

袖振者見毛可波之都倍久雖近度爲便無秋西安良禰波

初句は互ニ袖ヲ振ラバとなり

(玉蜻蜒タマカゲロ)ほのかにみえてわかれなばもとなやこひむあふ時まで

玉蜻蜒髣髴所見而別去者毛等奈也戀牟相時麻而波

右天平二年七月八日夜帥家集會

初句は雅澄の説に従ひてタマカギルとよむべし(卷二三二九頁參照)○第二句はチヨット

逢ウテとなり。相逢ふ時の短きにあかぬ餘にホノカニといへるなり○モトナを契
沖はヨシナク、宣長はメツタニ、雅澄はムザムザと譯せり(卷二〇三頁參照。あらずもが
なと思ふ時にいふ辭とおぼゆ。心外ニなどうつすべし

ひこぼしのつまむかへ船こぎづらしあまのかはらに霧のたてるは
牽牛之迎嬌船己藝出良之漢原爾霧之立波

霧を漕出づる船の水烟と見なしたるにや

霞たつあまの河原に君まつといかよふ程に裳のすそぬれぬ

霞立天河原爾待君登伊往還程爾裳欄所沾

霞といへるは即霧なり。卷二(一三四頁)にも

秋の田の穂のへにきらふ朝がすみいづへの方にわが戀將息

とあり○イカヨフのイは添辭、カヨフは往復するなり

天の河浮津之浪音さわぐなりわがまつ君し舟出すらしも

天河浮津之浪音佐和久奈里吾待君思舟出爲良之母

第二句は舊訓にウキツノナミトとよめり。眞淵は「浮は御の誤にて御津ノナミノト
ならん」といへり。案ずるに浮津は渡津の誤ならむ。ワタツといふ普通名詞は見及ば
ねど卷二なる人麿の長歌にワタツノアリソノウヘニとあるワタツも江の川の渡
津より出でたる地名なり

太宰諸卿大夫并官人等宴筑前國蘆城驛家歌二首

をみなべし秋はぎまじる蘆城の野今日を始めて萬代にみむ

娘部思秋芽子交蘆城野今日乎始而萬代爾將見

蘆城驛家は太宰府の東方にあり(卷四四六七頁參照)○初二は女郎花ト秋萩ト相交レル
となり。ケフヲハジメテは今日ヨリ始メテなり。ヨリガヲにかはれるなり

(たまくしげ)葦木の河を今日見者よろづ代までにわすらえめやも

珠匣葦木乃河乎今日見者迄萬代將忘八方

アシキ川は寶滿川の上流なり。見者を舊訓にミレバとよめるを古義にミテバに改
めたり。古義に従ふべし。ミテバはミタラバなり。マデニはただマデといはむにひと

し

笠朝臣金村伊香山ヲ作歌二首

(草枕)たびゆく人毛ゆきふらればにほひぬべくもさけるはぎかも

草枕客行人毛往觸者爾保比奴倍久毛開流芽子香聞

伊香山は近江にあり○人毛は人乃などの誤とおぼゆ○第三句は四段活に従はば

ユキフラバとよむべく下二段活に従はばユキフレバとよむべし。意は行キツツ觸

レナバとなり○ニホフは染マルなり

いかご山野邊にさきたるはぎ見ればきみが家なる尾花しおもほゆ

伊香山野邊爾開有芽子見者公之家有尾花之所念

第二句の野邊爾開有は上(一五〇二頁)なるヤマブキノ咲有野邊乃ツボスミレの處

にいへる如くヌノヘニサケルともよむべし○キミといへるは故郷人なり。結句は

尾花ガシノバレルとなり○伊香はイカグともよむべし。神名帳に伊香具神社とあ

り

石川朝臣老夫歌一首

をみなべし秋はぎ折禮ヲたまほこの道ゆきづとと乞はむ兒のため

娘部志秋芽子折禮玉梓乃道去裏跡爲乞兒

折禮は舊訓にタラレとよめり。宣長は折那の誤にてヲラナならむといへり。此説に

従ふべし。ヲラナは折ラムにおなじ。ミチユキヅトは途中ノミヤゲなり

藤原宇合卿歌一首

わがせこをいつぞいまかとまつなべに於毛也者將見秋風吹

我背兒乎何時曾旦今登待苗爾於毛也者將見秋風吹

第四句は舊訓にオモヤハミエムとよめり。契沖は面ヤハ見エムなりといひ千蔭は

「オモヤは面輪にてヤとワと通ふなり」といひ宣長は於を聲也を世の誤としてオト

モセバミム秋ノ風フケとよみ雅澄は千蔭の説に左袒せり。案ずるに將見は將瘦の

誤にてオモヤハヤセムにて面ヤ瘦セムなるべし。ヤハといふは普通はうらへかへ

る辭なれど又ただヤといふにおなじきもあり(玉緒四卷十二丁参照)否うらへかへ

る辭なるヤハは本集にてはヤモといひてヤハとは云はず(卷九なる松反四臂而有八羽のヤハの事は其歌の處にていふべし)されば今は面ヤ瘦セムといふに調の爲にハを挿めるのみ。或は者は衍字にてもあるべし。さらばオモヤヤセナムとよむべし。○結句は古義に従ひてアキノカゼフクとよむべし(舊訓及略解にはアキカゼノフクとよめり)○此歌は女になりてよめるにて一首の意は

我背兒ヲイツ來マサムゾ今カ來マサムト待ツニツケテ我面ハ瘦セナム、ウラサビシキ秋ノ風サヘ吹ケバ

といへるならむ。略解に七夕の歌なるべしといへり。げに然らむ。もしたただの相聞歌ならば秋相聞の部に入るべければなり。題辭に藤原宇合卿七夕歌一首とありけむ。七夕の二字をおとせるにや。○且は且の誤なり。イマを且今と書ける例は卷七(二二二六頁)に且今トカモとあり。又卷二(三二二頁)にはケフを且今日と書けり。

緣達師譚一首

よひにあひてあしたおもなみなばり野のはぎはちりにき黄葉はやつげ

暮相而朝面羞隱野乃芽子者散去寸黄葉早續也

初二はナバリの序なり。卷一(一〇三頁)にも

よひにあひてあしたおもなみなばりにかけながき妹がいほりせりけむとあり。ナバリは伊賀の名張なり。○モミヂは木々の紅葉なり。契沖が「即芽子の黄葉なり」といへるは非なり。秋ハギノ花ハチリニキとあらばこそしかも見ぬ。ハギハに對してモミヂといへるをいかで萩の黄葉とは見む。○訓むまじき也を添へて書ける例は卷二(三一〇頁)にアサツユノゴト、ユフツユノゴトのゴトを如也と書き、卷七(一二四二頁)にオトノサヤケサを清也と書き、上一五〇一頁にミルガカナシサを悲也と書き、卷十にもコヒコソマサレを益也と書けり。○緣達は契沖の云へる如く僧の名ならむ

山上憶良詠秋野花二首

秋の野にさきたる花をおよびをりかきかぞふればななくさの花 其一

秋野爾咲有花乎指折可伎數者七種花 其一

オヨビは指なり。カキは添辭なり

はぎが花を花くずばななでしこの花をみなべし又ふぢばかま朝貌の

花 其二

芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花 其二

文選の勵志詩、關中詩などに倣ひて其一、其二としるせるなり。○このアサガホを先哲或は牽牛子とし或は木槿とし或は桔梗とし或は旋花ヒルガオとせり。岡不崩氏の阿佐加保源流考にいへらく

山上憶良の秋野花の詠歌中なる阿佐加保は牽牛花に非ざることとは岡村氏の説の如し。即牽牛花は漢種なれば野生することなき筈なり。

○岡村尙謙の説は古今要覽稿卷第四百二十一(國書刊行會本第五の三九九頁)及箋註倭名類聚抄十卷二四丁に見えたり

而も木槿ならんとの説に對しても非認するに躊躇せざるべし。そは木槿も亦漢種にして我國に自生せざればなり。、、しかも木槿は木類なり

之によりて此朝貌の花は牽牛花にも非ず木槿花にも非ざること知らるべし。然

れども此歌の朝貌は何にか或一種の草花を指したるものなるは論を待たざるなり。されば田中道麻呂、藤井高尙、高田與清等は桔梗なりとし狩谷掖齋、岡本尙謙等は旋花なりと云へり

桔梗を阿佐加保とせる論者は新撰字鏡の和訓を以て唯一の論據とせるが如し。、、其論據の最薄弱なるを知るべし

予は萬葉以後に於ける阿佐加保は牽牛花の和名なりと斷言するを得るも萬葉集中の阿佐加保は遺憾ながら未其何たるかを考究すること能はず。ただ或は旋花ならんかと私考するのみなり

或は桔梗なるか或は龍膽花にてもやと思はるれどいかがにや。岡村尙謙等の旋花説は古典に就ての考證は得べからざるも事實に於て或は然らんか

といへり。右の説に加ふべき事はなけれど、なほ私案を述べむに牽牛子と木槿とは我邦にては野に生ふるものにあらず。又牽牛子こそ古書(但延喜以後)にまさしくアサガホと見えたれ、木槿をアサガホとするは朗詠集に槿といふ題の下に牽牛子の歌を録したるが始にてそれより以前に木槿をアサガホと訓める書なし。されば今

の歌のアサガホが木槿にあらざるは勿論牽牛子にあらざる事は明なり。次に桔梗は古今集物名に

きちかうのはな 友則 秋ちかう野はなりにけり白露のおける草葉も色かはりゆく

とあり。又本草和名以下にアリノヒフキ(又ヲカトトキ)とあり。かくアリノヒフキといふ和名のあるに拘はらずキチカウといへるはいかにといふにアリノヒフキといふ名は雅訓ならざれば、あてなる人たちは之を嫌ひて寧漢名をやはらげてキチカウと云ふを好みしならむ。こゝに新撰字鏡に桔梗 阿佐加保又云岡止々支また同享和本に桔梗 加良久波又云阿佐加保とあり。アサガホを桔梗とする人等は之を唯一の證としたれど元來字鏡は打任せて信すべき書にあらざる上に字鏡の著者は果して漢語の桔梗が如何なる物なるかを詳にして和名を充てしにやいとおぼつかなくおぼゆる事あれば此書のみによりて物の名を定めむは極めて危き事なり。

因にいふ。字鏡に阿佐加保又云岡止々支とあるは必しもアサガホ一名岡トトキといふ意に解すべからず。漢語の桔梗は邦語のアサガホに當り又岡トトキに當

るといふ意にも解すべし

次に旋花は本草和名以下にハヤヒトグサ(一名カマ)とありてアサガホの訓なし。されば信すべき古書(本草和名以下)にアサガホと訓めるは牽牛子の外にある事なし。然もその牽牛子は野生するものにあらねば今の歌のアサガホを牽牛子と認むべからざるは前にいへる如し。思ふに本集に見えたるアサガホはなほ旋花の事にて初此花をアサガホといひしを牽牛子西土より渡り來りしに其花旋花に似たればそれをもアサガホといひし程にアサガホの名は終に牽牛子に奪はれしにぞあらむ。但アサガホの名が牽牛子の専有となると共にそれに對して旋花がヒルガホと名づけられしにはあらじ。ヒルガホといふ名の古き書に見えざるを思へばヒルガホといふ名は遙に後になりておほせしならむ。即アサガホが旋花の古名なる事を忘れたる世になりてただ牽牛子に似て日中を盛とさく花なればヒルガホと名づけしならむ。なほ旋花と旋覆花との相まぎれたる事につきても云はまほしき事あれど煩はしければこゝには云はず。又カホ花につきては下に至りて云ふべし

天皇御製歌二首

秋の田の穂田をかりがねクラケクニ聞爾夜のほどもなき渡るかも
秋田乃穂田乎鴈之鳴聞爾夜之穂ホ籽呂爾毛鳴渡可聞

ホダヲまで、二句に跨れる枕辭なり○穂田は卷四(六四二頁)に秋ノ田ノ穂田ノカリ
バカとあり。夜ノホドロは同卷(八〇一頁)に夜ノホドロワガイデクレバとあり。夜の
明けぬさきなりといふ○第三句は略解にヤミナルニ又クラケキニとよみたれど
クラケキといふ辭は無し。古義にはクラケクニとよみて「クラケアルニといふほど
の意なり」といへり。此訓此説に従ふべし。卷一(一一五頁)なるミヨシ野ノ山ノアラシ
ノサムケクニのサムケクニと同格なり

けさのあさけ雁がね寒くききしなべ野邊の浅茅ぞ色づきにける

今朝乃且開鴈之鳴寒聞之奈倍野邊能浅茅曾色付丹來

第三句はキコエシナベの意としてあるべし。上(一五五三頁)にもケサノアサケカリ
ガネキキツ春日山ミミヂニケラシ云々とあり○且は且を誤れるなり

太宰帥大伴卿歌二首

わが岳にさをしかきなくサキハギ先芽の花づまとひに來鳴サシ棹カ牡鹿ナク

吾岳爾棹牡鹿來鳴先芽之花嬌問爾來鳴棹牡鹿

先芽を略解にサキハギとよみて

サキハギは初芽子なり。物は異なれどサイバリといへるも此サキに同じ
といへり。サイバリといへるは神樂歌なる

さいばりにころもはそめむ雨ふれどうつろひがたしふかくそめてば

とあるを指せるなり。物も異ならず。サイはサキの音便にてハリはやがて萩なれば
なり(卷一三〇七頁及参照)○花ヅマを略解に

芽子の咲ころ鹿の其芽子原に馴るゝものなれば芽子を鹿の妻として花ヅマと
はいへり

といへり。古義にはハナヅマドヒニと切りて

花ヲ妻問ニといふなり。ヅマをすみてよむべし。花妻ヲトヒニと云にはあらず

といへり。案ずるにハナヅマは新妻なり。そのハナはハナヨメ、ハナムコのハナに同
じ。又サキハギノは花ヅマの花にかゝれる枕辭なり。卷十四にもニコ草ノハナヅマ

ナレヤとあり○結句は棹牡鹿來鳴とありしを顛倒せるならむ。キナクサヲシカといふべき處にあらず

わがをか秋はぎの花風をいたみちるべくなりぬ見む人もがも
吾岳之秋芽花風乎痛可落成將見人裳欲得

三原王歌一首

秋の露はうつしなりけり(水鳥の)あをばの山の色づくみれば

秋露者移爾有家里水鳥乃青羽乃山能色付見者

第三句は枕辭なり。アヲバは枕よりかゝりては青き羽にて下へつづきては青き木葉なり○ウツシは略解に

いにしへよりまづ色を紙などに染置てきていつにてもきぬにうつすをウツシといふなるべし

といへり。ただ他を染むる物をウツシといひしなるべし。鴨跖草ツキクサの事をウツシ草又ウツシ花といふを思へ

湯原王七夕歌二首

ひこぼしのおもひますらむココロ從情みるわれくるし夜のふけゆけば

牽牛之念座良武從情見吾辛苦夜之更降去者

從情を舊訓及略解にココロユモとよみ古義にココロヨモとよめり。モとよむべき字なければココロヨリとよむべし○結句は夜ノフケユキテ別レマスベキ時ノ近ヅケバといふ意なり。古義に「夜の更ゆけば今は程なく逢給らむと思ひやりて云々」と釋きたれど、もしさる意ならばクルシとはいふべからず○更降はクダチともよむべし

たなばたの袖アタ續三更ヒ之五更アホは河瀬のたづはなかずともよし

織女之袖續三更之五更者河瀬之鶴者不鳴友吉

第二句を契沖千蔭はソデツグヨヒノとよめり。さて契沖は袖をかはすなりといひ千蔭は袖サシカへと譯せり。然るに雅澄は續を纏の誤としてソデマクヨヒノとよめり。此説に従ふべし。牽牛ガ織女ノ袖ヲ枕トスルといへるなり○三更之五更とお

る、文字の上にては奇異なれど三更はただヨヒに借れるのみ(三更とかけるをヨヒとよむべき例は卷十にハツセ風カクフク三更ハとあり。さてそのヨヒはいにしへ初夜の意にも、ただ夜といふ意にもつかひたり。こゝはただ夜といふ意なり。〇四五はケサバカリハ天ノ川ノ河瀬ノ鶴ハ曉ヲ告ゲテ鳴クニ及バズといへるなり

市原王七夕歌一首

妹がり^ニとわがゆく道乃^ニ河有者^ガ附目^ヲ緘結跡^ト夜更降家類^{ケル}

妹許登吾去道乃河有者附目緘結跡夜更降家類

二三句を略解にワガユクミチノカハシアレバとよみ古義にアガユクミチノカハナレバとよめり。案ずるに乃を爾の誤字として、或はもとのまゝにてワガユクミチニカハシアレバとよむべし。乃はニともよむべきこと卷三(三五九頁及四九六頁)にいへる如し。〇第四句は略解に一本に目を固とせるに據り又附を脚の誤としてアユヒツクルトとよみ、宣長は雄略天皇紀の歌に據りてアユヒナダストとよめり。案ずるにナダスの語例は雄略天皇紀に圓大臣が庭上にて戦死せむとして其妻に脚帶を求めし時妻の悲しみてうたひし歌に

おみのこはたへのはかまをななへをし、にはにたたしてあよひ那陀須も(臣ノ子ハ帛ノ袴ヲ七重著シ庭ニタタシテ、、)

とあり。契沖の説に「ナダスはタダスなり。那と陀と通ふなり」といへれどナダスは撫の敬語ならむ。ナツをナダスといふは懸をカカスといふ(卷二九頁御名ニカカセル)と同例なり。さて緘結をナツとよむべき由なければ宣長の説は従はれず。次にツクルの語例は皇極天皇紀に蘇我蝦夷が臣下の分を忘れて祖廟を葛城高宮に立て、八僧の舞をせし時の歌に

やまとのおしのひろせをわたらむとあよひたづくりこしつくらふも(大和ノ忍ノ廣瀬ヲ渡ラムト脚帶手作リ腰作ラフモ)

とあり。又本集卷十七なる大伴池主の長歌に
わかくさの、あゆひたづくり、むらとりの、あさだちいなば、おくれたる、あれやかなしき、たびにゆく、きみかもこひむ云々

とあり。右のタヅクリを千蔭守部等がツクロフの意としたるは非なり。ただ作ルといふ意なり。さて緘結はツクルとよむべき由なければ千蔭の説も従はれず。然らば

今の歌の第四句はいかによむべきか。試に云はば附を脚の誤とし目を衍字として脚絨をアユヒ、結跡をムスブトとよむべし(考同説)。アユヒムスブトは袴ヲ褰ゲテ紐モテソノ裾ヲ縛フトテとなり。○結句は三註ともにヨヅフケニケルとよめれどヨヅクダチケルとよむべし。

藤原朝臣八束歌一首

さをしかのはぎにぬきおける露の白珠、相左和仁たれの人かも手にまかむちふ

棹四香能芽二貫置有露之白珠相佐和仁誰人可毛手爾將卷知布

アフサワニの語例は卷十一に

やましろのくせの若子がほしといふわを、相狭丸わをほしといふやましろのくせ

とあり。契沖は

此二首を引合て案ずるに非分の物を押して領せむとする意をアフサワと云なる

べし

といひ宣長は

物語ぶみにオホザフといふ詞あり。これこのアフサワの訛れるにてそのオホザフといへる詞の意とアフサワと全同じ

といひ信友(比古婆衣卷十八全集第四頁)は

勢語なるアフナアフナオモヒハスベシナゾヘナクタクカキヤシキクルシカリケリのアフナアフナと同意なるべし。身の分に随ひて似合しきの意なり。オホザフと同じ言なりといふ説は非じ(○採要)

といへり。案ずるに源氏物語などに見えたるオホザフは尋常といふ意と思はるれば別語なり。アフナアフナとも同意の語にあらず。アフナアフナは随分の意なるにアフサワニは契沖のいへる如く非分の意にて後世のオホケナクと同意と見ゆればなり。○手ニマカムチフは取リテ其手ニ纏キ持タムトハ云フとなり

大伴坂上郎女晚芽子歌一首

さく花もうつろ△はうしおくてなる長意爾なほしかずけり

咲花毛宇都呂波厭奧手有長意爾尙不如家里

題辭の晚芽子を古義にオクテノハギとよめり。げに然るべし。○サク花モは人にむかへていへるなり。さてこゝにてはまだ萩を指していへるにあらず。ただ一般にサク花モといへるなり。○第二句は或ハ散リ或ハシボムハイヤナモノヂヤとなり。二三の間にコノ萩ノヤウニといふことを補ひてきくべし。オクテは晩熟なり。○第四句は長と意と顛倒したるにてココロナガキニなるべし。卷七(一四七一頁)にもにはつ鳥かけのたり尾のみだれ尾の長き心もおもほえぬかもとあれどそはアサキ心ヲワガモハナクニなどと同例なればもとのまゝにて然るべし。○一首の意は俗諺にサカヌウチガ花ヂヤといふに同じ。古義の釋は同意しがたし。○宇都呂の下に布をおとせるなり。

典鑄正紀朝臣鹿人至衛門大尉大伴宿禰稻公跡見庄作歌一首

(いめたてて)跡見のをかべのなでしこの花ふさたをりわれは△いなむ寧樂人のため

射目立而跡見乃岳邊之瞿麥花總手折吾者將去寧樂人之爲

典鑄正はテンジユノカミとよむべし。和名抄に鑄錢司を樹漸乃司と訓せり。是例とすべし(古義にはイモノシノカミと全部訓讀せり)。さて典鑄正は典鑄司の長官。衛門大尉は衛門府の判官なり。○稻公は旅人の庶弟なり。其事は卷四(六八六頁)に跡見庄の事も卷四(七八三頁)にいへり。○フサタヲリは卷十七なる家持の歌にも秋の田の穂むき見がてりわがせこが布佐多乎里けるをみなべしかもとあり。契沖は「ふさやかに多く手折なり」といへり。古義に物語どもに見えたる例を集めたり。フサニのニを省きたるなり。今も物の多きをフツサリといふ。○將去の上
に持の字を補ふべし

湯原王鳴鹿歌一首

秋はぎのちりのまがひに△よびたててなくなる鹿のこゑのはるけさ
秋芽之落乃亂爾呼立而鳴奈流鹿之音遙者

チリノマガヒニははやく卷二人麻呂の長歌(一八七頁)に見えたり。古今集春下にも

此里にたびねしぬべしさくら花ちりのまがひに家路わすれて
 とあり。チルマギレニといふことなり。○ヨビタテテは卷七(一二七八頁)にも
 まとかたの湊のすどり浪たてや妻よびたてて邊にちかづくも
 とあり。よび催すことなり。○二三の間に辭足らず。おそらくは元來旋頭歌にて
 秋はぎのちりのまがひに妻やまどへるよびたててなくなる鹿のこゑのはるけ
 さ
 とありし第三句のおちしならむ

市原王歌一首

時まちて落鐘禮之雨令零収△あさかの山之將黃變
 待時而落鐘禮能雨令零収朝香山之將黃變

略解には舊訓と契沖の訓とを折衷して

オツルシグレノアメヤメテ、、モミヂシヌラム

とよみ古義には落を衍とし一本に収の下に開の字あるを採り令を之の誤収開を
 敷耳の誤として

落鐘禮之雨令零収開、、モミダヒヌラム

とよめり案するにこれもおそらくは旋頭歌ならむ。第二句の落鐘禮能はフリシシ
 グレノとよむべし。第三句の雨令零収は令を衍字としてアメフリヤミヌとよむべ
 し(令を今の誤としてアメイマヤミヌとよむべきかとも思ひしかどなほさにはあ
 らじ)○さてアメフリヤミヌの次に今日毛可聞といふ一句ありしをおとし、なら
 む。一本に収の下に開の字あるは今日毛可聞とありし今日毛可の四字をおとし聞
 を開に誤れるなるべし。かく一句おちたるならむといふことは今の第四句アサカ
 ノ山者とあらでアサカノ山之とあるによりて推定したるなり。○將黃變は契沖に
 従ひてモミヂシヌラムとも(卷十に黃葉爲時ニナルラシとあり)雅澄に従ひてモミ
 ダヒヌラムとも(卷十五にシグレノアメニ毛美多比爾家里とあり)よむべし。○朝香
 山は所在明ならず。古義に

攝津住吉郡なる淺香山なるべし。難波の古き圖に住吉社、南の方に細江とて沼あ
 りてその南の方に淺香山あり。浦はその西の方にあり。淺香浦は二卷に出。又は此
 なるは陸奥の安積山にてもあらむか。さらば此市原王は陸奥へ下り賜へること

ありしか

といへり。案ずるに卷二(二七〇頁)にスミノエノ淺香ノ浦ニ玉藻カリテナとよめり。淺香山は今の和泉國泉北郡にありといふ

湯原王蟋蟀歌

ゆふづく夜心もしぬに白露のおく此庭にこほろぎなくも

暮月夜心毛思努爾白露乃置此庭爾蟋蟀鳴毛

ココロモシヌニは心モシナフバカリ即氣ガマイルヤウニといふことなり(卷三七七頁参照)○初句のユフツクヨは全體にかゝれり。又第二句のココロモシヌニは結句のコホロギナクモにかゝれるなり。第三句につづけては心得べからず

衛門大尉大伴宿禰稻公歌一首

しぐれの雨まなくしふれば三笠山こぬれあまねく色づきにけり

鐘禮能雨無間零者三笠山木末歷色附爾家里

大伴家持和歌一首

(おほきみの)御笠の山のもみぢ葉はけふのしぐれにちりかすぎなむ
皇之御笠乃山能黄葉今日之鐘禮爾散香過奈牟

安貴王歌一首

秋たちていくかもあらねばこのねぬるあさけの風はたもとさむしも
秋立而幾日毛不有者此宿流朝開之風者手本寒母

アラネバはアラヌニなり。コノネヌルは准枕辭なり

忌部首黒麻呂歌一首

秋田かるかりほもいまだこぼたねばかりがねさむし霜もおきぬがに
秋田疇借廬毛未壤者鴈鳴寒霜毛置奴我二

コボタネバはコボタヌニなり。霜モオキヌガニは霜モ降ルバカリとなり。上(一五四六頁)なるアエヌガニと同格なり。○壤は壤の誤なり

故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首

あすか川逝回岳の秋はぎはけふふる雨にちりかすぎなむ

明日香河逝回岳之秋芽子者今日零雨爾落香過奈牟

右一首丹比真人國人

豐浦寺は大和國高市郡飛鳥村豐浦にあり。推古天皇の小墾田、豐浦宮の跡なれば故郷といへるなり。此寺別名を櫻井寺又建興寺又向原寺といふ。本邦最初の尼寺なり。宣長の菅笠日記下卷(二一丁)に

その道を○あすか川の南のそひの道を、十町ばかり川上の方へゆけば豊浦の里、豐浦寺のあととはわづかに藥師の堂あり。今も向原寺といふ(○今は廣嚴寺と書くとぞ)。ふるき石ずゑものこれり。えのは井はいづこぞと尋ぬれど知れる人もなし、、さて此里は飛鳥川の西のそひにて川のむかひはすなはち雷村なり

といへり○略解に持統天皇紀を引きて大宮、飛鳥川原、小墾田、豐浦、坂田と書けるはわるし。飛鳥寺と川原寺とは別なれば飛鳥川原、小墾田、豐浦とあるべきなり。又略解には大官を大宮と誤れり

逝回岳は舊訓にユキキノヲカとよめり。宣長いはくユキタムヲカとよむべしと。げ

に此説の如し。ただ宣長が「岡の行廻れる所をいふ」といへるはふと思誤れるなり(古義も其誤を繼げり)。飛鳥川が岡を行廻れるにてその岡はやがて飛鳥岡なり。菅笠日記下卷(八丁)に

岡の里にやどる。かの寺(○たちばな寺)より近し。此あひだに土橋をわたせる川あり。飛鳥川はこれ也とかや。いまの岡といふ所はすなはち日本紀に飛鳥岡とある所にや

といへり。かくさだかに考定めながらいかにしてアスカ川ユキタムヲカノとあるを心得たがへけむ。さてユキタムヲカはユキタムル岳といふべきを當時はかく終止格にてもいひしなり(二四八○頁参照)。○飛鳥岡は飛鳥川の右岸、豐浦寺の地は左岸にありて甲は乙より川上なり。豐浦寺地の對岸は雷岡なり

うづらなくふりにしさとこの秋はぎをおもふ人どちあひみつるかも

鶉鳴古郷之秋芽子乎思人共相見都流可聞

アヒミツルカモは共ニ見ツルカナとなり。卷七(一四七二頁)にコミマクラアヒマキシ兒モといへるは薦枕ヲ共ニ枕キシ兒なり。今のアヒも之におなじ

秋はぎは盛すぎるをいたづらにかざしにささずかへりなむとや
秋芽子者盛過乎徒爾頭刺不搖還去牟跡哉

右二首沙彌尼等

イタヅラニは結句にかかれるなり

比丘尼が男子を引きて私房にて宴せしだにあるに沙彌尼をしてかゝる歌をよましめしはあさましともあさまし。當時の僧尼は一般にいたく墮落したりけむかし。○搖は挿の俗體なる挿を誤れるなり

大伴坂上郎女跡見田庄作歌二首

(妹が目を)始見之埼乃あきはぎは此月ごろはちりこすなゆめ
妹目乎始見之埼乃秋芽子者此目其呂波落許須莫湯目

第二句は六帖にミソメノサキノとよめり。契沖は之に従ひて「ミソメノ埼跡見庄に有歟」といへり。然るに冠辭考には

此歌の端に跡見田庄作歌と書つれば他し所を思ひてよめる歌ともいふべから

ず。はた同卷に紀朝臣鹿人至大伴宿禰稻公跡見庄作歌とて射目立而跡見乃岳邊之とよみたるも端の詞今とひとしくて即跡見の岳邊をよめるを思ふに今も跡見之岨邊などやうに例の草の手にて有しを跡を始に誤りてミソメとよみたればその下の訓がたきにさかしら人岨邊は埼の一字よとて字も訓もあらためてミソメノサキとはしけんかし

といひ古義には跡見之埼有の誤としてトミノサキナルとよめり。古義の説に従ふべし。チヨット見る事をトミといふ(トミカウミなどいふトミにはあらず)そのトミに地名の跡見を取成して妹が目ヲといひ冠らせたるなり。さて山にも埼といひつべきは論なし。卷十四にもヲツクバネロノ山ノサキとよめり。但古義に「海邊ならでも埼といへる例あり」として上一四八六頁なる春山ノサキノヲヲリニを擧げたるはあさまし。サキノヲヲリは花のさきなびける事なるをや。○コノツキゴロは卷四(六九九頁)に

しら鳥のとば山松のまちつつぞわがこひわたるこの月ごろを
とあれど今と意異なる如し。今はおなじ卷七八三頁に見えたる此郎女の長歌に